

## 頽廢の河と再生への道

—『恋する女たち』における性の力学—\*

英米文学教室 門 田 守

ロレンス(D. H. Lawrence)の『恋する女たち』(*Women in Love*, 1920)において、バーキン(Rupert Birkin)とアーシュラ(Ursula Brangwen)のペアはいわゆる星の均衡(star-equilibrium)という男女関係の至高の状態を達成する。これは男女が互いに独立しながらも、回転する星のように影響を及ぼし合って互いを高め合う関係である。セイガー(Keith Sagar)はバーキンとアーシュラが理想的恋愛の状態に至る階梯を、ロレンスの書簡集に言及しながら、次の三段階にまとめている(96)。

*Stage 1.* The isolate self in proud singleness of being.

*Stage 2.* The polarity, the equipoise of an achieved sexual harmony.

*Stage 3.* A conscious purpose in life, a coordinated effort towards a society which will embody life-values—'A number of people united ... to fulfil collectively the highest truth known to them' (CL 1:462)

この手紙はイタリア北西部の港湾都市ラ・スペツィア(La Spezia)のイギリス人領事である、友人ダンロップ(T. D. Dunlop)に1916年7月12日付で宛てたものである。

ところでセイガーはバーキンとアーシュラは第一段階と第二段階は達成しているが、第三段階は成就してはいないと言う(96)。さらに彼は星の均衡の概念自体について、このように不信感を訴えている。

Birkin's crucial image is star-equilibrium, but Lawrence fails to work this into the story in any other form than in Birkin's own set-speeches. Consequently it fails to become an organic part of the novel. (97)

セイガーと同じように、バーンズ(Aidan Burns)も『恋する女たち』を論じる際に"The central question of the relation between the social and the individual self is never solved." (99)と言い、作品中で理想郷や自由の獲得という問題は一切解決されていないと主張する。星の均衡理論が正しく達成されていれば、社会での個人と他者の関係は既に解決されているはずである。よってバーンズの懐疑感もとどのつまり、この段階でのロレンスの恋愛の哲学の根幹へと向けられているのである。同様にダレスキー(H. M. Daleski)はバーキンの獲得した純粋性をただの経験の産物であると疑い、アーシュラが彼に見出す神の子としての性質はただ彼の男としての独立性の獲得に過ぎないと言う。ダレスキーの彼らの関係についての"their 'accession into being' is directly due to the experience itself" (153)という言葉は、ロレンスの思想の奥行きをあまりにも無視してはいないだろうか。

\* "The River of Degeneration and the Path to Rebirth: The Dynamics of Sexuality in *Women in Love*," The Department of English and American Literature, Tottori University, Mamoru Kadota

確かにパーキンが数回にわたってアーシュラに説く、男女が互いの個我を守りつつ相手と融合する論理は多分にオカルト的で曖昧な部分を残している。ロレンスはそれをあまりにも安易に人間一般に拡大し、人間は完全に個として独立し、かつ他者と諧和した状態で社会にいられると説いている。これをただのユートピストとしての発言と見るのは簡単だが、その姿勢はそれで済ますには惜しいほど現代の男女の繋がりを含めた人間関係への正面切った取り組みである。

星の均衡理論はロレンスの性の力学のやはり中心思想を成すものであると思う。そこには初期の『息子と恋人たち』(*Sons and Lovers*, 1913)における母性の支配からの男性の独立や、さらには『虹』(*The Rainbow*, 1915)における太母の女性像から自立した女性への視点の推移という問題が流れ込んでいる。またその理論は『恋する女たち』の後に続く『翼ある蛇』(*The Plumed Serpent*, 1926)における神の如き男性指導者たちへの女性の依存の問題や、『アロンの杖』(*Aaron's Rod*, 1922)における今度は男性と男性の血の契りのテーマに結ぶつく下地を用意しているように思われる。星の均衡理論は直接的には、『恋する女たち』におけるブラングウェン家の姉妹をめぐる二組の恋人たちの運命を説明するのみである。しかしそこにはロレンスの性の理論の中核があると言わねばならない。

本稿では本能的性愛に落込むグドルーン(Gudrun Brangwen)と現代的な意味での物質主義に憑かれたジェラルド(Gerald Crich)の互いに他者への支配欲に満ちた性愛と、アーシュラとパーキンの達成する独我の存在と他者への愛を融合した性愛の相互関係の特徴を考察してみたい。前者はせいぜいアフロディーテ(Aphrodite)的太母の支配する性愛に至るだけの、いわゆる頽廢の河を下るのみの男女関係である。それに対して後者は具体的男女の深奥にある、太古からの血の流れである男性性と女性性への崇拜に基礎をもつ、ロレンス的な新しい人間存在の再生への道を提供するものである。最初にアーシュラとグドルーンの結婚観や男性観の対立を分析し、それぞれの恋人との関わりを探っていきたい。そして星の均衡理論がロレンスのユートピズムにも関わるものであり、その理論がかりに現実に実行不能のものであるとしても、理念として彼の思想の根幹を成していることを示したい。

## I

クリッチ家の結婚式に行く前のアーシュラとグドルーンの描写から、彼らの性格、結婚観、性意識などはどのように分析されるであろうか。アーシュラは26歳、グドルーンは25歳になっている。彼らは対照的な人格を現している。その性格上の亀裂は彼らの結婚意識において最も鮮明に現れている。ダイバティスタ(Maria DiBattista)は「姉妹たち」("Sisters")の章を指して"Sisters' centers on the radical isolation of the modern woman, alienated from marriage and its central affirmations" (72)と言う。女性の身の振り方という伝統的テーマは、この姉妹の性的在り方から現代における人間復活のテーマまで掘り下げられていく。アーシュラとグドルーンはベルドーフアー(Beldover)にあるブラングウェン家の出窓のある部屋で会話をしている。最初にグドルーンが姉に彼女が結婚をどう考えているのか切り出す。妹の頭には姉は結婚して現在よりもいい立場に至るかもしれないという思いがよぎる。妹のグドルーンは結婚を単なる経験の一つぐらいにしか考えていないのである。そんな妹の態度をアーシュラは"Do you think it need be an experience?" (WL 53)と非難している。アーシュラは結婚にもっと重要なものを見出しているようだ。それはむしろ経験というものの最後になるかもしれないのである。アーシュラは自分自身の独立した結婚観をもっていうようである。彼女は女として独立した意識をもっている。アーシュラはじっくりと物事を考え、

結婚に対して単なる経験や男性への依存以外のものを求めているのである。

アーシュラは“if I were tempted, I'd marry like a shot” (54) と言うが、自分から結婚相手を決して求めてはいない。むしろ結婚したくてたまらないのは姉の過去の恋愛経験について詮索するグドルーンの方である。こうした関係は姉妹の間での能動性と受動性の問題に還元されるであろう。“They both laughed, looking at each other. In their hearts they were frightened.” (54) というように、ブラングウェン姉妹はお互いに結婚問題については笑い合いつつも、両者の間での根本的な緊張関係は否めない。お互いがお互いに不安感を抱いているのである。なるほどブラングウェン姉妹には共通点があるだろう。それは男に対して平々凡々に従うのではなく、確固として自我を主張していく点である。彼女たちは酌婦性や媚婦性ではなく、性関係に確固とした己を貫くアルテミスの清冽な処女性をもっている。これが両者の共通点である。

ブラングウェン姉妹の最も大きな違いは姉アーシュラの受動性と妹グドルーンの能動性である。それらはアーシュラが精神性の女性であるのに対し、グドルーンが肉体性の女性であることに繋がる。アーシュラには男女の性関係でも何か大きな成果が成熟することを期待する態度が見られる。彼女には“sensitive expectancy” (54) があったのである。これに対しグドルーンには“perfect sang-froid and exclusive bareness of manner” (54) という物怖じしない大胆さしかない。そして彼女は単なる“a smart woman” (54) としてしか評価されないのである。それはアーシュラの植物的な受動性とは比較にならないほど浅はかな能動性でしかないのである。グドルーンは“Don't you find, that things fail to materialize? *Nothing materializes!* Everything withers in the bud.” (55) と言って、男女関係が樹木が実るように成熟していくことを待つことができない。彼女は花や実が成熟していくことを待たず、それを蕾のうちに枯らしてしまうのである。これはグドルーンの決定的な性急さを表わしているのである。この内面の深さへの無感覚さの故にグドルーンはいずれ出会う恋人のジェラルドと悲劇的な結末に至るのである。

アーシュラは将来に対して開かれた、成熟したセクシュアリティをもっている。彼女は積極的に子供を欲しがると、生み育てる性に目覚めている。しかしグドルーンは子供は要らないと言う。アーシュラが“only superficially” (55) に人間とは子供を欲しがらないのだと言う時、彼女は心の奥底では人間とは創造的なセクシュアリティに開かれていることを積極的に訴えているのである。この場面では“superficially”という言葉はかえって、グドルーンのセクシュアリティの表層性を暗示しているようにも受け取られ得る。

アーシュラは自分の内側に“that strange brightness of an essential flame” (55) という、きらきと輝く炎をもっている。この炎とは何のメタファーであろうか。それは網を掛けられ、抑制されている彼女の強い女性としての自己実現への願いなのである。彼女は殻を破って芽を出したい植物のように、己の女性性(femininity)を完成させたいのである。彼女には強い自我があり、それが相手の男を求めて己の自我を実現させるように自分を駆り立てるのである。

グドルーンはそうではなくて、明らかに肉の女として形容されている。アーシュラが妹を“so charming, so infinitely charming, in her softness and her fine, exquisite richness of texture and delicacy of line” (56) とみなすからである。体つきの柔軟さでも、彼女には肉体的な女らしさが強調されている。グドルーンのアレクサの愛称でもその性格は窺い知ることができよう。彼女の愛称は“Prune” (56) である。これはスモモの滴るような、瑞々しさやたおやかさで、グドルーンの肉体的な女性性(mundane femininity)を表しているのである。それに対して、アーシュラはいわば霊としての女性性(spiritual femininity)をもっていると言えるであろう。アーシュラは硬い自我をもっているが、グドルーンに

はそれがないのである。彼女は精神的に案外に脆く、主体性がなく、つつい他人の説に左右されやすく、また他人に頼りがちである。これは彼女がジェラルドという実業家とレルケ(Loerke)という芸術家の間での恋愛に迷うことに典型的に現れることになる。

クリッチ家の長女の結婚式に出かける際の、またその式場でブラングウェン姉妹の態度はどうであろうか。ここではグドルーンの弱さが露骨に現れ、彼ら姉妹の内面の差が鮮やかに示されている。姉妹はイギリス中部の汚れた炭坑町を通過して教会に赴く。しかしもともとグドルーンはチェルシー(Chelsea)やサセックス(Sussex)で芸術を学んでいたのであって、彼女はこの田舎のベルドーヴァーの炭坑町を最初から拒絶していたのである。だから「姉妹たち」という章に現れているように、グドルーンはこの炭坑町が嫌で嫌でたまらないのである。しかしこの炭坑町のすぐ近くには未だ文明によって汚されていないウィリー・グリーン(Willey Green)という森があった。ロレンスはその美をこう描いている。

Yellow celandines showed out from the hedge-bottoms, and in the cottage gardens of Willey Green, currant-bushes were breaking into leaf, and little flowers were coming white on the grey alyssum that hung over the stone walls. (59)

グドルーンは美醜も含めた、こうした外側の世界から我が身を引き離し、抽象的な美の世界という、弱々しいが安住できる世界に閉じ込めるのである。彼女はいわば産む性としての大地から、自らを疎外した女性なのである。

グドルーンが思い描く炭坑町は次のようである。

It is like a country in an underworld,' said Gudrun. 'The colliers bring it [sooty cabbage stumps] above-ground with them, shovel it up. Ursula, it's marvellous, it's really marvellous—it's really wonderful, another world. The people are all ghouls, and everything is ghostly. Everything is a ghoulish replica of the real world, a replica, a ghoul, all sordid everything sordid. It's like being mad, Ursula. (58)

このイメージは地下世界であり、そこの人々は魔物であったり、狂人であったりする。ここには土地と和解できないグドルーンの姿が認められるであろう。グドルーンは"as if she were treading in the air" (58)というように、夢遊病者のように通りを進んで行く。また彼女は"as if at any minute she might be precipitated to the ground" (58)と感じ、まっ逆さまに地面に叩きのめされるような印象を抱く。グドルーンの心は泣きわめき、外見はともかくも彼女は精神的にはなんら遅しいところがない幼児のようである。彼女は心の中で帰りたいという願いを繰り返す。グドルーンの自我は虚弱で、彼女は絶えず誰かに取り縋らないではいられないのだ。この態度は畢竟、彼女のセクシュアリティにも反映してくる。すなわち彼女は男性に絶えず恐怖感を抱き、その反動として男性を絶えず支配しなくてはいられなくなるのである。マクラウド(Sheila MacLeod)が言うように、グドルーンの女性性の未熟さは彼女が結婚へ憧れつつも、心理の深層においてそれへの恐れも抱いていることにも看取されよう(106)。

教会に行く前後の描写では、グドルーンは常に回りの環境に疎外感をもって恐がっている。彼女は回りの人間を恐がり、姉に頼りがちである。この態度は将来の彼女のジェラルドへの依存を予見させる。グドルーンは帰郷したこと自体を深く後悔している。ここでの彼女の意識の特徴は、まるで絵画を描くような意識で隣人たちを見ていることである。彼女は対象の中に参加できないのである。結婚式に参列している人々は彼ら自身で完結している。彼らは既に絵画の中における"a finished creation" (61)になった状態にあるのである。これはグドルーンが結婚関係が人間関係をフィニッシュ

ユさせるものと考えていることを明らかにしている。逆にアーシュラは醜惡な炭坑町を通る際に妹を守ろうとしている。これは最終的にグドルーンの芯の弱さを暗示しているのであろう。そしてグドルーンはトーテムとして狼をもつと思われるジェラルドには、とても危険な相手であることがわかるであろう。トーテムは種族の守護神のことである。ジェラルドの精神性には極北のイメージも重ねられている。ジェラルドの死に方や彼とグドルーンとの関係の破綻はアルプスの雪の世界で起こるからである。これは彼らの関係の破綻の予表的なイメージの提示となっているのである。

ハーマイオニ(Hermione Roddice)とバーキンの関係であるが、特に前者ハーマイオニの人物造型は興味深い。グドルーンがジェラルドに夢中になっているように、ハーマイオニはバーキンを愛している。既に彼らはしばらくは愛人関係にあったようである。ハーマイオニは金持ちで、絹のドレスを纏い、薔薇色のシクラメンを携えている。ハーマイオニはどのような特徴をもった人物であろうか。彼女においては、いろいろな知性がとぐろを巻いて頭脳に詰まっていると言われている。彼女は大変に知性的な女性であることがわかる。蛇のイメージは男を捕らえて離さない、魔女の雰囲気をもつ。ハーマイオニはダービーシャー(Derbyshire)の男爵の娘であり、社会改革に夢中になっている。彼女を捉えている社会は男性の社会であり、彼女は男が女性化したような女なのである。

クリッチ家の結婚式の場面にハーマイオニは現れる。彼女は「文化の担い手」(*"Kulturträger"* [63])と呼ばれているが、文化や体制を信奉し、それを伝達する者としての役割を負わされている。彼女のモデルはオックスフォードシャー(Oxfordshire)にあるガーシントン・マナー(Garsington Manor)で当時の文学者たちに対して、知的ホステス役を果たしていたレイディ・オトリーン・モレル(Lady Ottoline Morrell)であったらしい(Trease 111)。このハーマイオニは一生かかって自分を無敵な者、攻撃に対して磐石な者とするのである。その実、彼女は実際にはいつも攻撃を受けやすい、弱い者と感じている。彼女は自分の鎧にはいつも秘密の裂け目があると感じているのである。彼女の内面には恐ろしい空虚があり、常に満たされない思いに沈んでいる。

ハーマイオニはバーキンを愛しているが、彼を真心から愛しているわけではない。また彼女はバーキンという男性性そのものを愛しているわけでもない。ただ彼女は彼がいる時にのみ、自分が完全であって、満たされていると感じられるのである。彼女は心理的には彼に完全に依存している。すなわち彼女は女性性を開花させているのではなく、未成熟な自己を彼に守ってもらいたいのである。そんなハーマイオニにバーキンは既に愛想をつかし、彼女から別れたがっている。彼女は見かけを着飾った表層だけの女であり、見せかけだけでできている。そして見せかけとは文化というものと繋がってくると思われる。彼女の着飾った様子やたつぷりと詰まった知性は、彼女の文化の伝達者としての役割を強調しているのである。そしてまた文化の伝達者と言えば、西洋での男女の関係はキリスト教のモラルが中核になっていることが思い起こされる。キリスト教では男が愛を与える方で、女がそれを受け取る方になっているのであるが、ロレンスは実態では女は男の愛をむさぼっていると考えるのである。文化の担い手のハーマイオニはバーキンの愛を要求して、それを糧としている。

ジタルーク(George J. Zytaruk)はキリスト教的愛を批判し、こう言う。

To become one with God is a violation of the individual self, since the very existence of all life is made possible by the myriad identities that constitute life. We must, therefore, struggle not to achieve oneness with the rest of creation but to bring to flower the individual, spontaneous self. (241)

ハーマイオニはこのような現実の西洋的愛の在りようを体現している。それは個として独立してい

るアーシュラとは対照的な立場である。ロレンスは『『恋する女たち』への前文』("Foreword to *Women in Love*")において、『恋する女たち』と『虹』との関係について"This book is a potential sequel to *The Rainbow*" (63)と言っている。アーシュラの独立した性格は元々対だった前作からの影響物なのである。恋人に依存するハーマイオニは彼を失うくらいなら殺してしまった方がよいと思って、実際彼を衝動的に殺害しようとするのである。

キリスト教についてロレンスは『アポカリプス』(*Apocalypse*, 1931)の中でその断罪を行っている。

The individual cannot love: let that be an axiom. And the modern man or woman *cannot* conceive of himself, herself, save as an individual. And the individual in man or woman is *bound* to kill, at last, the lover in himself or herself. It is not that each man kills the thing he loves, but that each man, by insisting on his own individuality, kills the lover in himself, as the woman kills the lover in herself. The Christian *dare not love*: for love kills that which is Christian, democratic, and modern, the individual. (A 123)

博愛主義についても同様である。

Then what about that other love, 'caritas', loving your neighbour as yourself?

It works out the same. You love your neighbour. Immediately you run the risk of being absorbed by him: you must draw back, you must hold your own. The love becomes resistance. In the end, it is all resistance and no love: which is the history of democracy. (124)

現代の愛情関係についての予言的書において、ロレンスはハーマイオニ的な知性的かつキリスト教的な博愛・改良主義を否定しているのである。カーモド(Frank Kermode)もバーキンのイギリスの完全な死と再生の必要性を説く点を指摘しつつ、『恋する女たち』におけるアポカリプスの傾向を論じている(67-71)。実際ロレンスはこの頃第二のノアの洪水が起こり、世界の破滅を期待していたらしいのである(Trease 114)。

さて、男の愛を強要するタイプの女はロレンスでは別の作品『息子と恋人たち』に詳しく現れている。ここでは主人公ポール(Paul Morel)の母親ガートルード(Gertrude)はピューリタンの家庭の出身で、知的で禁欲的な女であり、ハーマイオニの先駆をなしている。優秀な長男のウィリアム(William)はロンドンで事務仕事をするようになるが、運悪く丹毒症で死んでしまう。首につけていたカラーでできた傷がもとであった。とすると、母親の期待は次男のポールに一身に集まることになる。彼は医療器具製造会社に勤めることになる。これは作者ロレンスの経歴と一致している。ウィリアムが死んだ頃ポールも肺炎に罹って、死にかかると。ガートルードはやっとの思いでポールを回復させ、ますます自分の生き甲斐を次男の将来にかけるようになる。ポールも男なので徐々に母親から離脱したが、女性に関心をもち始める。しかし彼が最初に好きになったミリアム(Miriam Leivers)という文学少女は清教徒の出であり、感傷的で観念的な恋愛に憧れる傾向があった。ポールはミリアムに憧れるが、今一步彼女を愛するということまでは至らない。ポールは今度はミリアムとは全然性格の違うクララ(Clara Dawes)という人妻と出会う。その不倫は彼女の夫のバクスター(Baxter)に知られて決裂するが、ポールはかえって彼に殴られることでかつての懐かしい父親の記憶を取り戻すことになる。これは既にポールがクララの魅力を越えて、もっと高い自我の主張をしていこうという立場にあったことを明らかにしていると思われる。ところが、ポールはクララとの関係でも自分が縛られているという感情を禁じ得なくなる。彼はミリアムとの場合は精神的に縛られていたのであるが、クララとは今度は肉体的に女性に縛られていると感じ始めるのである。ポールは自分

の自我が圧倒されるのを嫌うようになる。いわば、彼は自らの自我の独立性を主張したいのであろう。

ポールは自分がミリアムやクララとうまくやっていけないのは、自分が無意識のうちに母親に憧れて、彼女のもとから立ち去りたくはないと思っているからではないかと気づく。偶然にガートルードは癌にかかって危篤状態に陥る。ポールは意識的に母親のためでもあり、また自分の母親から離れなくてはいけないという気持ちを満足させるために、わざとモルヒネを秘かに規定量以上飲ませて母親を死なせてやる。これはフロイド(Sigmund Freud)のエディプス・コンプレックスと関係している。エディプス・コンプレックスについては愛人で後に妻になるフリーダ(Frieda)を介して、フロイドの弟子のオットー・グロス(Otto Gross)の思想を知っていたから、ロレンスはそれをここで反映させたいのである。

『恋する女たち』でハーマイオニから別れたがるパーキンの内面は、故意に子供のそれとして表現されている。

And this, this conjunction with her, which was his highest fulfilment also, with the perverseness of a wilful child he wanted to deny. With the wilfulness of an obstinate child, he wanted to break the holy connexion that was between them. (64)

これはパーキンの女性による知的圧制への反発の意志の底流に、ポールのガートルードからの離脱の願いが流れていることを表していると言える。

ポールは母親の死後、誰にも頼れなくなって、ミリアムに会いに行く。しかしミリアムはもとのままの狭い精神しかない女性である。ポールは頼れるのは自分しかないことに気づき、自分の自我意識を高め、一人で逞しく生きていこうと決心する。ロレンスと言え、性的なものを非常に高く、重視している作家ではないかと思えるのであるが、案外結論としてはセクシュアリティ自体を越えて、主人公の自我の崇高さに至るという結末が多いように思われる。『虹』では、アーシュラはアントン(Anton Skrebensky)との関係を越えて、一人で逞しく生きていこうとする。『恋する女たち』でもアーシュラとパーキンの力の均衡状態は、性的な力もさることながら、互いの自我を高め合うという関係であった。ロレンスは案外に個人の自我の独立性に重きを置く作家であったと思われるのである。

さてガートルードは文化や社会の体制、あるいはキリスト教的な愛のモラルを代表するような女性である。ロレンスはこういう女性は本来の女性性を実現していないと考えるのであろう。彼女とは違って、アーシュラは本来の芯の強い女性性をもつ、ロレンスがこの『恋する女たち』を書いた段階での理想的な男女関係を実現するのである。

またその先のクリッチ家の結婚式での花婿と花嫁の行動にも、ロレンス的な現代の性愛への批判が現れている。つまり花婿は最初やって来ず、花嫁はやきもきしている。花婿がやって来ると、花嫁が誘惑するように呼ぶ。

'Tibs! Tibs!' she cried in her sudden, mocking excitement, standing high on the path in the sunlight and waving her bouquet. (66)

この後で花嫁は突然に向きを変え、花婿から逃げ出す。花婿は彼女を追いかけるが、あたかも彼女に導かれるかのように教会に入ってしまう。

'Ah-h-h!' came her strange, intaken cry, as, on the reflex, she started, turned and fled, scudding with an unthinkable swift beating of her white feet and fraying of her white garments, towards the church. Like a hound the young man was after her, leaping the steps

and swinging past her father, his supple haunches working like those of a hound that bears down to the quarry. (66-67)

確かに男性が女性を捕まえる構図として、この一連の動作は見える。しかしながら奇妙なことに逆に女性が男性を意識的に操り、彼女の望む行動をさせているとも考えられるのである。何故ならその後、こうした勝ち誇ったような彼女の態度が見えるのだから。

She, her flowers shaken from her like froth, was steadying herself to turn the angle of the church. She glanced behind, and with a wild cry of laughter and challenge, veered, poised, and was gone beyond the grey stone buttress. In another instant the bridegroom, bent forward as he ran, had caught the angle of the silent stone with his hand, and had swung himself out of sight, his supple, strong loins vanishing in pursuit. (67)

教会に連れ込まれて行く花婿の様子を見ると、これは全体としてキリスト教的性愛を迫る女性的な性愛の具現化でもあるし、今後のハーマイオニとパーキンを暗示しているようにも思われる。また男性が女性の肉体的誘惑に応じる点で、この場面は後にパーキンがアーシュラに語るアフロディーテ的性愛とも通じている。さらにはこの花嫁がクリッチ家の人工池で水死することを考え併せると、彼らのコミカルな追跡劇は象徴的な現代の男女の性愛関係を表しているとも考えられる。池の底から水死体になって発見された花嫁ダイアナ(Diana)は月の女神の名称を帯びさせられている。その点だけでも、彼女のアフロディーテ的性愛との親近性が感じられる。引き上げられた彼女の死体の様子は不気味である。花嫁の死体は自分が誘惑しようとした若い医者の死体と一緒にあって発見された。彼女の両手は青年の首を締め上げ、ちょうど彼が溺死する前に、彼を水中で締め殺したような恰好である。これはあのジェラルドとグドルーンのアルス山中での悲劇を暗示させる光景である。何故ならば水中ではなく雪の中で、ジェラルドは自分から離れていくグドルーンを締め殺してまでも所有しようとしたのだから。この二組のカップルともが肉と肉の関係において、頽廢の河を下るように、互いを所有し合ったのである。

## II

それでは小説の中で最も注目されるパーキンとアーシュラの愛の関係はどのように発展していくのであろうか。パーキンは一見して悲観論者のような話をした後で、雛菊の花の咲き方にとても拘っていく部分がある。パーキンはその雛菊の咲き方が最も発展した民主主義的な人間の在り方であると言う。民主主義と言っても、ロレンスは具体的な政治的信条としての概念をイメージしているわけではない。書き起しも脱稿も第一次大戦最中であつた『恋する女たち』は当然に工業主義や帝国主義に反発を示す。しかしシェックナー(Peter Scheckner)の指摘するように、この小説は社会の上部構造と下部構造や、資本家と労働者の対立に焦点は当ててはいない(57)。むしろこの雛菊の議論は個としての人間の在り方に関わってくるのである。

最初にパーキンとハーマイオニとの関係を明確にしておきたい。ハーマイオニはパーキンにどういう接近の仕方をするのであろうか。ロレンスは一般的に性の文学に傾倒していった作家として、全ての主張が性的なアナロジーで語られるように思われる。しかしロレンスがいろいろな男女関係のモデルを使って提示していることは、ただ肉体的な意味での性ではなくて、突き詰めていけばいくほど、われわれが普通に考える男女の性関係では捉えきれない観念的な意味を帯びているようである。ハーマイオニがパーキンに行くことはただの肉欲の行使ではない。



ハーマイオニはパーキンの肉体も精神も暴力に訴えてでも所有しようとする。それは彼女のもつ母性というものの本質的性格を明かしていると思われる。最初にその部分を見ておきたい。パーキンはハーマイオニの空虚な肉体性、観念の塊のような人間性を批判している。そして彼女の小さな頭に詰まっているものは屑のような観念の断片であり、彼女の望みは自分の意志の下に男性を押さえつけていくことなのである。パーキンはそういう彼女の本質を見抜いている。彼によればハーマイオニは世の中の事象を鏡に映してしか見ることができず、ひたすら塔の上の幽閉所で機を織ることしか許されないシャーロット姫(Lady of Sharlott)になぞらえられる。ハーマイオニの仕事は彼によれば"that Lady of Sharlott business" (91)に過ぎないのである。これは彼女の社会的功績が世の中の現実を踏まえていない、頭の中から織り出されただけの美辞麗句でしかないことの謂であろう。彼女の支配欲について、パーキンはこうまくしたてる。

'But your passion is a lie,' he went on violently. 'It isn't passion at all, it is your *will*. It's your bullying will. You want to clutch things and have them in your power. You want to have things in your power. And why? Because you haven't got any real body, and any dark sensual body of life. You have no sensuality. You have only your will and your conceit of consciousness, and your lust for power, to *know*.' (92)

はたして、その本質は誠にそのようであったことが明らかになるのである。ハーマイオニはアーシュラ、グドルーン、ジェラルドといった一行を自分の屋敷のブレッダルビー(Breadalby)に招いていることになっている。そしてハーマイオニが自分の好きなパーキンにも一緒に散歩に出ようと誘うのであるが、彼は本を読むのに夢中になっていて頑として彼女の言うことをきかない。自分の言うことをきかないパーキンを、彼女は殺意をもって殴り倒そうとしている。

She was not swift, she could only move slowly. A strong spirit in him woke him and made him lift his face and twist to look at her. Her arm was raised, the hand clasping the ball of lapis lazuli. It was her left hand; he realised again with horror that she was left-handed. Hurriedly, with a burrowing motion, he covered his head under the thick volume of Thucydides, and the blow came down, almost breaking his neck, and shattering his heart. (163)

己の恋人の殺害は相手をモノ化してまで、自己の意志に服せしめんとする所有欲の現れであろう。

面白いことにパーキンは前にハーマイオニに対して、お前は何のセクシュアリティもない女だと言ったことがある。ところがここでは、ハーマイオニはパーキンをめちやくちゃにして殺してしまうことに官能的な喜び、エクスタシーを感じ取っているのである。

A terrible voluptuous thrill ran down her arms—she was going to know her voluptuous consummation. Her arms quivered and were strong, immeasurably strong. What delight, what delight in strength, what delirium of pleasure! (163)

これはハーマイオニにはセクシュアリティがないわけではなくて、それが歪んだ、好ましくないものであることを示していると思われる。ハーマイオニの性は男を支配することにセクシュアリティの充足を求めるのである。ただし、その欲望の出発点は観念や地位の充足といった多分に頭脳的な部分から発している。先を端折って言えばグドルーンも同じような支配欲を示すが、彼女の場合の出発点は肉体の欲望の充足となっていることに注意せねばならない。

ロレンスにおいて支配する母性や、支配する女性性というものはかなり広範囲に現れている。これにはおそらくロレンスの母親リディア(Lydia)の影響もあるのであろう。またロレンス自身もおそ

らく母親に単なる母親の枠を越えた愛情を感じていて、彼女に接近していたことも影響しているであろう。しかし彼はその母親に接近しつつも、母親に反発して違う女性に走ったり、独立した生活を求めたり、愛人の夫に男性同士の友情関係を求めたりしているのである。こういう母性へと接近したいけれども、同時にそれから離れようとするアンビバレンスが、ロレンスの作品ではいろんな母性恐怖症として顕在化していると思われる。

『息子と恋人たち』でのガートルードなどはオイディプス・コンプレックスの三角形、つまり父ウォルター(Walter)、母ガートルード、息子ポールの三角形の関係内で起っている、支配する母性としての役割を帯びている。ガートルードは現実の汗みどろの夫に飽き足らず、彼の代わりに息子を理想的人物に仕立て上げようとするのである。それは一つの所有する母性の現れであろう。これと同じくハーマイオニは偉大なる母性の典型として、知性的側面からパーキンを操ろうとする。しかしその根源は性的な歪みから発生しているのである。

パーキンはこんなハーマイオニにうんざりして、一人である独立性が女性との共存よりも遙かに良いものだと思っている。

There was this perfect cool loneliness, so lovely and fresh and unexplored. Really, what a mistake he had made, thinking he wanted people, thinking he wanted a woman. He did not want a woman—not in the least. The leaves and the primroses and the tree, they were really lovely and cool and desirable, they really came into the blood and were added on to him. He was enriched now immeasurably, and so glad. (165-66)

パーキンはこういう精神状態でアーシュラに対峙するのである。

さて、ここから「島」("Island")という興味深い章が始まる。パーキンは普段はけっこう愛想の良い人間であるが、一人になるとどこか変わったところがある。最初からそういうパーキンの中の非人間的で癒されない部分が、アーシュラを日常的自我から外の世界へと連れ出すのである。パーキンが小説中の他の人間たちと違うところは非常に率直で、自己の心の中身をそのままさらけ出し、真剣に自分の人生と向き合った暮らしをしていることである。"I don't make much of a success of my days" (185)とパーキンは自分の人生が失敗であったことや、自分の風采が上がらない外見のことを語る。アーシュラはそれほどパーキンを醜いとは思ってはいないらしい。パーキンは何もかもうまくいかなくて、いつもいらいらしている。アーシュラはそんな彼に"Why should you always be doing?" (186)と、どうしてそんなにいつも行為(doing)の世界にばかり拘って、なぜ"a walking flower" (186)のようになって暮らさないのかと問う。アーシュラは行為(doing)ではなく存在(being)の価値に目覚めることをパーキンに薦めているように思われる。また彼が"if one has burst into blossom" (186)と言うとき、それは世間的かつ経済的成功ではなくして、自分が本来もつ自己を開花させるという意味で判断されるべきであろう。パーキンはずっとフラストレーションの状態にある。彼は"Humanity itself is dry-rotten, really." (186)と人間という観念は死んでしまい、人間たちはその内奥の神秘を失い、空っぽになってしまったと嘆く。パーキンとアーシュラは微妙に対立するが、少なくとも共通のテーマについて考えているように思われる。そしてここではずっとパーキンはニヒリストとも言われかねないようなペシミズムに陥っているようにも見える。

だがパーキンにはあまりにも能動的に人生を否定して、否定しきった先にその否定することの底を破り得る可能性が残されているようである。パーキンによれば人間たちは愛というものの実相を取り違えているらしい。彼はこう言う。

Look at all the millions of people who repeat every minute that love is the greatest, and

charity is the greatest—and see what they are doing all the time. (187)

人間は愛と偽って憎しみばかり相手にぶつけ合っているのである。パーキン作家ロレンスのマウスピースの人物である。あまりにも観念的に思考し過ぎるきらいがあるパーキンが考えているのは負の原理(principles of negativism)とも呼ばれ得よう。彼の疑似進化論的歴史観では、人間とは創造の失敗作であり、いずれ滅んでいくものであるらしい。ここでアーシュラはパーキンと対立する。パーキンが負の原理によっているとすれば、アーシュラは一生懸命にそれにあらがひ、正の原理(principles of positivity)に従っている。彼女は何とか人類が破滅するという考えを否定したいのである。アーシュラはパーキンがいう人間は反・創造されたものであるという思想の底には、それでも”in spite of himself, he would have to be trying to save the world” (189)という人間を救いたいという願望があることを見抜く。ここで両者の意見は決裂することがなく続いていることがわかる。

しかしアーシュラが我慢ならないことは、パーキンがあまりにも抽象的過ぎて”The Salvator Mundi” (189)になろうとしていることである。これは抽象的な人類や世界の救世主になろうとする意志である。アーシュラはそれと正反対に個々の人間たちの愛を擁護している。とするとパーキンは観念の世界に向かうのに対し、アーシュラは具体的な肉体の世界に向かっていることがわかる。両者の思考法は一致することがないが、互いに絡み合って進行していることがわかる。これは雛菊に関する議論の発展に重要な要素を提供することになる。両者ともに違った進み方をするけれども、目標は同じく愛による充足ということになると思われる。このようにである。

’... Love isn’t a desideratum—it is an emotion you feel or you don’t feel, according to circumstances.’

’Then why do you care about people at all? she asked, ’if you don’t believe in love? Why do you bother about humanity?’

’Why do I? Because I can’t get away from it.’

’Because you love it,’ she persisted.

It irritated him.

’If I do love it,’ he said, ’it is my disease.’ (189-90)

どう見ても、パーキンの側が不利な議論のようである。パーキンの思考法は完全には論理的に人類の破滅を求めているのではなくて、彼は人類を愛そうとしているとアーシュラに看取されるからである。アーシュラの側の思想の問題点はずっと先のアフロディーテに関するセクシュアリティの部分で明らかになる。

こういう違う原理が絡み合う形で彼らの関係が深まることが注目されるべきであろう。そして雛菊に関する話に発展する。水門に近づく岸辺で細かい雛菊の花が流されて行く。これらはパーキンが流したものである。これらの雛菊はここでは、それぞれが個人としての人間としてイメージされている。アーシュラは花の意志はただあるのみであって、その花のように人間はその場その場の状況に充足しているべきであると考ええる。これは突き詰めるとアーシュラのどんな人間観を表わしているのであろうか。ロレンスは特定の啓示的な場面に重きをおく作家であるが、ここでは小説全体の目標点が表示されていると思われる。アーシュラは花が流れるように個人はその基本的な性向に応じて生きているのがよいと考えているのであろう。それは彼女の受動的肉体性を表わしている。すなわち彼女は妹グドルーンのように男の愛を強要したりはしなくて、肉体に基礎をもつ男女の親和的な関係に憧れているのである。ただ彼女には人間の肉体性に対してはただの肉欲でない荘厳さを、肉体性の向こう側には理想的な男女関係を見出していることは言えるであろう。これもグドルーン

とは違う点であるが、今後のパーキンとの関係の深まりで明らかになってくると思われる。

反対にパーキンは小さい花の集団は理想的な民主主義的共同体であると言う。彼の言う理想的な人間たちの状態は個々の人間がそれぞれ独立していて、決して他と交わることなく自己を実現していることである。雛菊の美は個々の人間の才能の開花とでも言うべきであろう。パーキンの言う“freedom together” (193)とはそういう文脈で解釈するべきであって、これは人間とはお互いの中に埋没してしまうべきではなくて、自分というものを主張し合うべきであるという意味であろう。人間とは互いにぶつかり合って自らを発展させていくべきものなのである。これをアーシュラとの関係で言えば、男女とは互いに完全に混じり合い、溶け合っていく関係ではだめということなのである。この関係をユディシュター(Yudhishtar)は“*She [Ursula] believes in an absolute surrender to love.*” (172)と表現している。それと対照的に男女はいつも互いに主張し合い、ぶつかり合って、互いに成長するべきであることをパーキンは説いているのである。つまり男は男らしくなければならぬ必然的に女と対立し合わなければならないし、反対に女はより女らしくなければならぬ必然的に男と対立し合わなければならないのである。両者が一致して睦み合う関係はだめだということなのである。そしてアーシュラがこの段階で言うパーキンとの愛とは、まさにパーキンが否定する、睦み合う男女の関係なのである。これは実はもっと先の「月のごとき」(“Moony”)という章でより詳しく発展させられていくことになる。

ロレンスはエッセイ「民主主義」(“Democracy,” 1936)において、ホイットマン(Whitman)の挙げた民主主義の二大原理である(1) The law of the Average と(2) The Principle of Individualism, or Personalism, or identity について批判を加えている(SE 73)。ロレンスは徹底して平均化した市民や抽象的な国家の概念に反発している。“Men are not equal, and never were, and never will be, save by the arbitrary determination of some ridiculous human Ideal” (75)なのである。また抽象的な市民社会について、彼は“The State is a dead ideal. *Nation* is a dead ideal.” (76)と指弾している。最良の社会とは個人が個人として自覚的かつ自発的に成り立っている状態である。ロレンスの言葉をうければ“The highest Collectivity has for its true goal the purer individualism, pure individual spontaneity.” (77)なのである。人間が自己自身になるためには二つの手段があるらしい。さらにロレンスは“The only thing man has to trust to in coming to himself is his desire and his impulse.” (91)と言う。欲望も衝動も日常化されて、それぞれに人間の自動化された反応体系である身体の機能的充足と精神の抽象的理想追求に堕する危険性があるらしい。それでもロレンスは人間は自己に忠実であることによって、新しい民主主義に至ることができると考えている。矛盾するようではあるが、個人は自己を犠牲にして他者との共存を図るのではなく、かえって自己の内に留まることによって民主主義を確立するべきであると説かれる。こうした場合に自己は比較対照として個々の他者の自我をもたず、大文字の他者として対峙するしかないらしいのである。この事情をロレンスはこう説明している。

Where each thing is unique in itself, there can be no comparison made. One man is neither equal nor unequal to another man. When I stand in the presence of another man, and I am my own pure self, am I aware of the presence of an equal, or of an inferior, or of a superior? I am not. When I stand with another man, who is himself, and when I am truly myself, then I am only aware of a Presence, and of the strange reality of Otherness. There is me, and there is *another being*. That is the first part of the reality. There is no comparing or estimating. There is only this strange recognition of *present otherness*. (92)

甲乙あるいは優劣の比較対照がなくなり、自己以外の人間が大文字の他者として認識されれば、確かに純粹な個としての人間から出発した人間集団が成り立つであろう。だからこそロレンスは民主主義の第一の目的として“each man shall be spontaneously himself—each man himself, each woman herself, without any question of equality or inequality entering in at all” (93)と、個としての人間の再生に期待するのである。

さて雛菊の比喻を使ったバーキンの民主主義の考えの奥底にも、こうしたロレンスの思想が流れ込んでいるはずである。この場合ロレンスは人間が個としての立場に目覚める手段として、男女の性愛を考えているように思われる。最も最小で基礎的な人間の結びつきとしての男女の理想的状態を考えることで、彼は理想的民主主義を射程に置いていたのである。

さてアーシュラとバーキンに劣らず、グドルーンの性格もまた平行して鮮明に描かれていく。アーシュラとグドルーンはクリッチ家の人工池での水上パーティーに参加する前に裸で水浴びをしたり、前者は歌い、後者は踊りをしたりする。ここでは特に、非常に印象的なグドルーンの踊りの様子や、彼女がジェラルドの牛たちに挑みかかる様子から彼女の性格について考えていこう。グドルーンの性格はアーシュラのそれと対比されるように明示されている。アーシュラは怪我をしたジェラルドに“I hate people who hurt themselves. I can feel it.” (228)と言い、他者の痛みを感じざる得ない自己の性質を告げる。これは彼女に肉体的感受性でも、相手の立場になれる受容的態度があることを示す。グドルーンにはそうした他者を認める鷹用さはない。ただ彼女は“*There was something childlike about her, trustful and deferential, like a child*” (229)という描写に見られるように、いかにも子供供して相手を完全に信頼するか、あるいは“*strong and unquestioned at the centre of her own universe*” (231)という状態で宇宙の中心に居座ったように落ち着いているアーシュラへの羨望を感じるかのどちらかであった。そしてロレンスは大変に微妙な仕方で書いているのであるが、グドルーンには子供のように全面的に相手を受け容れる態度と同時に“*she must always demand the other to be aware of her to be in connexion with her*” (231)というように、むりやりにでも相手に自分を認めさせる執拗さがあつた。これはともにグドルーンの自我の弱さや他人への依存意識があつたことを表しているのである。ただ、彼女には人一倍強いセクシュアリティがあつた。これが彼女の踊るダルクローズ・ダンス(Dalcroze dance)で明らかになってくる。

グドルーンのダンスは“*as if it were some strange incantation*” (231)とあるように、不思議な呪文にかかったような調子であり、無意識のうちに体を震わせる官能的なリズムに乗っている。ロレンスは“*as*”や“*as if*”といった直喩で彼女のダンスを表現する。それは“*as if she were confident of some secret power in herself, and had to put it to the test*” (233)という表現に見られるように、グドルーンが自分自身の中にある秘密の力を信頼し、その力を発揮する場としてそのダンスを捉えていることを示している。それ以降の表現を見れば、グドルーンを突き動かしている言動力が性的なパッションであることは一目瞭然で理解されるはずである。“*It was evident she had a strange passion to dance before the sturdy, handsome cattle.*” (233)とあるように、畜牛との交感関係は彼女の性的なドライブの現れであろう。また、彼女の踊り方の描写は文体と踊りのリズムが一致している。分詞構文の重ね合わせはグドルーンの動きを追うように進んでいる。引潮の隠喩で語られるパッションの流れは、もちろん性的感情の流れである。また流れや液体は女性性のメタファーであるとも言われている(Siegel 164-84)。牛たちはスコットランド産の雄牛なのであるが、グドルーンとの接触を恐がっている。とすれば、グドルーンは男性的力への支配力を揮っていることになるのではあるまいか。雄牛たちの怯む様子はこのようなのである。

... they ceased pawing the ground, and gave way, snorting with terror, lifting their heads from the ground and flinging themselves away, galloping off into the evening, becoming tiny in the distance, and still not stopping. (235)

雄牛たちは完全にグドルーンに手懷けられている。”the long-horned bullocks” (235)などは、わざとロレンスはファロスとの暗示性を引っかけて描いているのは明瞭である。これもグドルーンの一歩強い性格が男性を支配する、肉体的・性的力であることを示していると思われるのである。

グドルーンとジェラルドとの愛情関係には、どんな特徴があるのであろうか。特に放牧された牛たちをめぐる彼らの関係は何を表わしているのであろうか。とりわけグドルーンの側からの彼への働きかけにはどんな意味があるのであろうか。グドルーンが牛に関して言う”Turn where? Turn away?” (236)や”Turn against me?” (236)といった言葉は、彼女の男性に対する支配力への自信のほどを暗示している。この場合は牛への自信はジェラルドを支配する自信へと繋がるはずである。

そしてあまつさえグドルーンはジェラルドに牛を一頭くれと言う。この申し出にジェラルドは一頭、後で送り届けさせようとししか答えない。この牛の要求は単に牛だけをくれという申し出ではないであろう。それはグドルーンからのジェラルドの男性的セクシュアリティへの挑戦状であろう。彼女はジェラルドのセクシュアリティをよこせと言っているのである。グドルーンはジェラルドの返答の真意を推し量りながら、不思議そうな目付きで彼を見ている。また、グドルーンは畜牛などは恐くないと堂々と言う。そして彼女は手の甲で軽く、しかし真剣な目付きでジェラルドをいきなり殴る。そして彼女は自分の内面に抑えきれない、ジェラルドに暴力を揮って彼をめちゃくちゃにしてやりたいという欲望が沸き上がってくるのを感じる。直に思い当たるのは、このグドルーンのパッションとハーマイオニがバーキンに抱いた殺意は似ているのではないかということである。ただハーマイオニが自分の貴族性やエゴイスティックな性格からバーキンを思わず殺そうとしたのに対して、グドルーンは性的なドライブに駆られてジェラルドに攻撃を加えてしまったのであろう。その攻撃が性的アナロジーをもつことは、ジェラルドの反応で確かめられると思う。ジェラルドは肺に力が漲り、抑え難い情緒が自分を押し流しているのを感じる。もちろんこれはグドルーンへの復讐の願望であり、それが性的支配力に対する闘争本能であることは明かであろう。セイガーは”Gudrun and Gerald strain for knowledge of each other, and, hence, power over each other.” (93)と言い、知識としてのお互いの探り合いに注目しているが、この場では性的支配の闘争に絞って考えるべきであろう。グドルーンは”It’s you who make me behave like this, you know” (237)と言って、彼から愛情をむしり取ろうとする。ハーマイオニもグドルーンもどちらも男性へと攻撃を加えて、支配しようとする母性の働きを示していると思われるのである。彼らは支配する母性に捕らわれた女性たちなのである。

ただし、運悪くジェラルドも実は支配する男性なのである。彼は性的なパッションというよりも権力欲に憑かれた男性なのである。彼は自分が父親から受け継いだ炭坑の労働者から自分の飼う家畜や小動物に至るまで、すべての近隣のものを支配しておかないと満足できない人間である。ジェラルドは近代が生んだ資本家の支配欲をもった男性なのである。バーンズがジェラルドを評して”He would become God himself, creating his own nature and the natures of the men who work for him” (99)というのは蓋し至言である。

まとめると、アーシュラとバーキンの関係はまずはそれぞれが個人として自立することを前提とする。そして彼らは決してお互いに通俗的に一身同体化した夫婦としてではなく、常に距離を保ってお互いを高め合う関係にある。それに対してグドルーンとジェラルドは心理的な原因は違いにし

でも、互いに支配しようと格闘し、彼らの関係に相応しい悲惨な最後を遂げるのである。

### III

「水上パーティ」("Water-party")でのグドルーンとジェラルドとの愛の関係の特徴はどうであろうか。ここではグドルーンがボートを漕いで、ジェラルドがそのボートに乗っていることになっている。これは象徴的にどんな意味を表しているのであろうか。特にグドルーンのジェラルドへの愛の態度はどうであろうか。また彼女が自我を喪失してジェラルドに夢中になるのは、姉のアーシュラとバーキンの関係の発展と比較してどういう視座を提供しているのであろうか。ここではずっとジェラルドがグドルーンに夢中になっている状態である。彼の目は夢中になって彼女を見つめている。ジェラルドは"I'm not angry with you. I'm in love with you." (237)と、グドルーンに愛を告白する。ジェラルドは自分の自我を放棄してしまうことや、失うことに感づいている。グドルーンはそれが面白くて、嘲るように、そしてわざと彼を傷つけるように笑う。グドルーンはどんどんと関係を迫ってくるジェラルドを制している。ここでのグドルーンとジェラルドの愛の力関係は、明らかにグドルーンが上である。

グドルーンもジェラルドも両方が相手を支配してしまおうと力を及ぼし合うのであるが、それはパラドキシカルな関係を発生させている。つまり相手を手に入れようとすることは、実は自分を支配的な地位に置く、すなわち自分の自我の純粋性や至高性を高めることにはならないのである。グドルーンもジェラルドも互いに相手を取ろうとして、その度に自分の自我を喪失し、無意識的状态に陥っていくと言わざるを得ない。

ちょうどそのように、ジェラルドは精神を失った赤ん坊のようにになって、盲目的にグドルーンに付き従っている。彼はただの"a striding, mindless body" (238)に過ぎないのである。この後に彼が自分が事故で殺した弟のことを思い出すことは、彼が罪を犯したトラウマに付きまといわれていることを表わしている。聖書の「創世記」("Genesis")におけるアベル(Abel)殺しのカイン(Cain)の逸話が下敷になっているのは明瞭である。この点は『恋する女たち』のアポカリプティックな要素に注目している批評家によって既に指摘されている(Kermode 70 & Oates 227)。しかしここでは、これは何よりも幼児性への復帰として解釈されるべきであろう。矛盾するようであるが、ジェラルドはグドルーンを捕まえようとしてかえって自己を失っているのである。

バーキンがアフロディーテ的性愛を否定する部分を経て、彼のペシミスティックな破滅のサイクル論が続く。ジェラルドとグドルーンはカヌーに乗り、バーキンとアーシュラは大きなボートに乗船する。ランタンの彩色された灯にグドルーンは夢中になってはしゃぐ。暗い闇夜の中で彼ら登場人物たちの本当の人間性が照らし出されていく。どうやらグドルーンの幼児性も隠せない事実のように思われる。

このグドルーンがジェラルドを乗せてカヌーを漕いで進んで行くことは、彼女がこの恋愛のイニシアティヴを取っていることを表わしているのであろう。ここで密かにグドルーンが力でジェラルドを負かしていることに満足感を覚えていることに注目すべきであろう。この辺りの表現は微妙に彼らの力関係を表している。

By her tone he could tell she wanted to have him in the boat to herself, and that she was subtly gratified that she should have power over them both. He gave himself, in a strange, electric submission. (243)

ジェラルドは男女間の電位の関係で従属的になっている。ロレンスはよく男女の恋愛の力の移り変わりを電位で表すことがある。このカヌーで深夜の池を渡るシーンは彼らの象徴的な力関係を示しているのであろう。

事実”he stood swooning with the perfect fire that burned in all his joints” (243)と、ジェラルドはグドルーンと一緒にいられる喜びで体の関節が燃えているようで、気を失いかかっている。逆にグドルーンは猛禽類が餌を襲うように彼を捉えている。これはグドルーンの攻撃的肉体性を示している。ジェラルドが暗闇で”There is a space between us.” (243)と訴えるのは、心理的な融合感のなさの証であろう。いくら”But I’m very near.” (244)とグドルーンが言っても、彼らは心理的には決して融合できないのである。

グドルーンはジェラルドの男らしさを飲み込み、酩酊したような感覚を味わう。これは彼女がジェラルドの男性的オーラに酔いしれている様子を表わしている。同時にまた、ジェラルドも単調な水の音やランタンのかたかたという音、さらにさらさらいうグドルーンのスカートの音の中で、闇夜の雰囲気に飲み込まれてしまう。いつもは緊張感に溢れてぴりぴりしているはずのジェラルドは、その場の雰囲気の中に没入してしまう。彼はいわば子宮の中に帰った胎児のように自我を捨て、全体と一致して至福の感覚を味わう。彼は完全にリラックスしている。

微妙なジェラルドとグドルーンの恋愛の力学的関係は最初はジェラルドがグドルーンにのめり込むが、徐々にグドルーンも彼に夢中になるという推移を遂げるようである。というのはこの池の中に誤って落ちた人間がいるという知らせを聞いた辺りから、今度はグドルーンがジェラルドの中に飲み込まれるという変化が起るからである。カヌーは未だにグドルーンが漕いでいるのだが、ジェラルドは完全に我に返る。グドルーンは今この瞬間に一人の人間が池の中で死にかかっているという事実が恐くてしょうがない。彼女は不安の虜になっている。それは”The terrible, massive, cold, boundless surface of the water terrified her beyond words.” (248)という、彼女の慌てた様子から窺い知ることができる。逆にジェラルドは一生懸命に落ちた人間を救おうと水の中に潜ったり、出てきたりを繰り返している。そんな彼はグドルーンにふとあざらしのように見える。あざらしは男性的精力の象徴であろう。グドルーンはジェラルドの男性性の圧倒的力を目の当たりに感じる。その後のグドルーンの変化は男のセクシュアリティに夢中になった、女のさがをそのまま提示するようである。この辺りのグドルーンの様子を仔細に読めば、簡単に彼女の心理の変化は掴めるであろう。いわば彼らの間で今度は恋愛の力学的関係が逆転して、グドルーンがジェラルドの中に埋没して自我を喪失するという状況が発生するのである。グドルーンは水に濡れたジェラルドの腰の様子にうっとりして、しきりの彼の肉体の美しさを讃嘆する。

The beauty of his dim and luminous loins as he climbed into the boat, his back rounded and soft—ah, this was too much for her, too final a vision. She knew it, and it was fatal. The terrible hopelessness of fate, and of beauty, such beauty! (248-49)

彼女はジェラルドの肉体に男性性のヴィジョンを見たような気さえる。ジェラルドの体は彼女にはただの男性の体ではなくて、ぼんやり浮かんだ闇の中で男性性の受肉した姿に思えるのだ。それは”an incarnation, a great phase of life” (249)なのである。またグドルーンはこうしたジェラルドを自分が決して越えられない存在であり、性でありかつ生の完成間近の姿として捉える。姉のアーシュラにしても彼女の恋人のパーキンの男性的魅力に、ただの肉体としての男性ではなくて神聖な男性性の受肉した姿を認めることはあるが、その中にグドルーンのように埋没してしまうことはない。いずれにしてもグドルーンは男性の力や男の世界の価値を痛いほど教えられて、ちょうど水



没した少女のように自我の喪失を体験する。

その時のグドルーンの感覚はちょうど前にジェラルドがふと漏らしたのと同じように, "an isolation unbearable, through which nothing would penetrate" (249)であった。これも彼女と恋人の間での心理的疎隔感を表わしているのであろう。

まとめるとジェラルドにしてもグドルーンにしても、相手を支配しようとして逆に己を喪失して、心理的袋小路に行き詰まってしまうという状態に陥るということが言えると思われるのである。グドルーンは前に分析したように牛の群れの中で女性のセクシュアリティを讃美するような、大変に肉体的な牽引力が強い女性である。これに対しジェラルドは炭坑経営のエンペラーであり、資本主義の親玉のような存在である。いわば彼は男性的権力の塊のような存在と言えるであろう。それが行き着く世界が池の水の中の死せる宇宙のような, "as cold as hell" (251)のような世界であることはまた象徴的なことである。

ここでグドルーン的な愛のあり方が、どのようにアーシュラとバーキンの均衡した愛のあり方と関係していくのかをもう少し探っていくことにしたい。グドルーンは雄牛に取り囲まれた状態で自分の女性的セクシュアリティを讃えるような踊りを踊ったのであるが、このことは後で考えてみたいバーキンが池に映った月を割る儀式でのバーキンとアーシュラのやりとりと無縁ではないと思えるのである。ハーディ(Barbara Hardy)は『恋する女たち』は散文的な直線の構造ではなく、詩的かつ象徴的叙述によって構成されていると言う(140)。象徴的場面は島のように作品中に点在し、互いに結び合っている。読解中にそうした場面は既に出た場面を読者の内面において、再び意味あるものに再生させる。そうした象徴的な出来事の例として、グドルーンの舞踊とバーキンの月割りの儀式は、女性の「太母」("Great Mother or *Magna Mater*")としての性質へのロレンスの反応として連続した描写であると思われるのである。

それを考える際『恋する女たち』の前作である『虹』における、典型的なロレンスの太母性への態度を見ておきたい。ここでは三代にわたるブラングウェン家の女性たちの性へのあり方が描写されていくのである。この中で二代目の娘アナ(Anna)の夫ウィル(Will)への性的態度を見ておきたい。ここではアナはグドルーンよりも極端に性的陶醉能力が高い女性である。というのはアナはウィルの子供を身ごもった時、それを喜び、女性性を讃えるかのように素っ裸で官能的なダンスを踊るからである。これはグドルーンのダルクローズ・ダンスの先駆的な描写である。

アナとウィルは肉体的には完全に諧和していて、何の矛盾もわだかまりもないように思われるのである。しかし徐々にアナは夫が自分に対して権力を掌握していることがいたたまれなくなり、密かに夫婦関係に亀裂が走るようになる。

She was only afraid of all that was not herself. It pressed round her, it came to her and took part in her, in form of her man, this vast, resounding, alien world which was not herself.

And he had so many weapons, he might strike from so many sides. (R 166)

ウィルは夫という形で自分を圧迫していると彼女には思えてくるのである。そこでアナには心理的にウィルから離脱しようとする素地が生まれることになる。アナはその後妊娠した後で、寝室で半ば無意識的に服を脱いで裸でそれを祝うような踊りを踊る。

And she had to dance in exaltation beyond him. Because he was in the house, she had to dance before her Creator in exemption from the man. On a Saturday afternoon, when she had a fire in the bedroom, again she took off her things and danced, lifting her knees and her hands in a slow, rhythmic exulting. He was in the house, so her pride was fiercer. She

would dance his nullification, she would dance to her unseen Lord. She was exalted over him, before the Lord. (183-84)

このようにアナは自分の太母性を讀える。この後この体験はウィルの意識に深く刻み込まれ、彼はアナに負い目をしよい込むことになる。アナは生命の神秘に根ざした存在であるのに対して、ウィルはただの日常的で、教会での仕事に精を出す平凡な男でしかないからである。まさしく『虹』におけるこの章が"Anna Victrix"すなわち「勝利者アナ」と名付けられているのは、太母性が男性性を凌駕することを表していると言ってよいであろう。『恋する女たち』に戻ると、グドルーンはこうしたアナの支配する女性性を体現した女性であると言えるであろう。そしてそうした支配しかつ支配される関係が不毛であることを、一步踏み込んでロレンスはこの作品で言おうとしていると思われるのである。

ところでジェラルドの妹のダイアナ(Diana)が水死することは、どんな意味を帯びているのであろうか。それはジェラルドがかつて事故で自分の弟を殺してしまったことと繋がっているのであろうか。また彼が池の水中で体験する、疑似的な死の世界の体験は小説の展開の中でどんな意味をもつのであろうか。さらに彼が水中での自我をなくしたような状態になるのは、どういう意味をもっているのであろうか。

簡単なことであるが、ダイアナの死は彼女の冒頭での結婚式の場面と繋げずには考えられないと思われる。それは女性が男性を導く関係、かつ男性が最初は躊躇するが次第に彼女に飲み込まれてしまう関係である。これはグドルーンとジェラルドの関係の予表をなすものであると思われる。そしてダイアナがクリッチ家の娘でジェラルドの妹であることも忘れてはいけないうちであろうと思われる。"Di-Di-Di-Di-Oh Di-Oh Di-Oh Di!" (246) や "Di-Oh Di-Oh Di-Di!" (247) といった呼びかけは、当然に音韻的に"die"という死の暗示を帯びている、象徴的な雰囲気醸し出す働きをしている。

そこでグドルーンのジェラルドへの肉体的欲望は最高に高まるのであるが、皮肉にもジェラルドは疑似的な死の体験をする。彼は水底で死せる宇宙とも言える世界を体験するのである。彼は"But it's curious how much room there seems, a whole universe under there; and as cold as hell, you're as helpless as if your head was cut off." (251) と言う。そして彼は"you wonder how it is so many are alive, why we're up here" (252) と語り、生きている世界こそが異常であって、死の世界こそが安定していて普通の事物の状態なのだと言う。これはジェラルドとグドルーンの行き着く死の世界の暗示であろう。

というのは、こうした水辺での遊びの前にパーキンがアフロディーテ的性愛への警告をなしているからである。彼によれば、女性によって支配された生物学的増殖の論理に衝き動かされた性愛とは"the dark river of dissolution" (238) という頽廢の河なのである。彼は大方の人間がその河を下っているだけなのだ、と我々に警鐘を鳴らす。そうしたパーキンに対して、アーシュラは"You mean that Aphrodite is really deathly?" (238) と言う。彼女はパーキンがアフロディーテ的女性の支配する性愛、つまり産みかつ殖やす性愛が分解への道であると考えていることを的確に見抜いている。

ジェラルドが弟を事故で殺したように、今度は彼は愛を独占するためにグドルーンの首を締めようとする。また彼が池の中で無意識になることは闇夜の中でグドルーンが無意識的にジェラルドに夢中になるのと同じように、もつれ合う二人の関係が意識を高め合う関係ではないことを証しているように思われる。逆にパーキンとアーシュラは互いに結び合いつつも、自分が一個の男であり女であることを意識している関係を維持している。これらの男女の関係はそれぞれが互いを照射し

合う関係にあつて、常に較べ合っていかなければならない。そのためにはバーキンの闇夜の儀式を見てみなければならない。ここでは支配するのではなくて互いを尊敬し合つて、それによって互いが成長していくという、ロレンス独自の恋愛論が展開されることになるのである。これが彼によれば、新たな性愛関係の樹立による現代人の再生への道なのである。

「月のごとき」の章でバーキンが池に映った月の反射を、石を投げてしきりに割ろうとするのはどういうことを表しているのであろうか。なぜ彼は月を割ろうとしているのであろうか。その心理の在りようを探ってみよう。グドルーンの態度から月割りの儀式の象徴的意味を探ることができる。そしてそれはロレンスのこの段階での、男女のあり方の理想的姿を表しているのではないだろうか。

アーシュラはここで最初から、社会からの離脱の感覚を体験している。彼女は社会から全ての関係を洗い去って、森の中に入る。彼女が愛するのは子供たちや動物たちである。社会的規範や習慣に彼女は超然としている。こうした態度のここでの描写はアーシュラが月を割るバーキンの行為に参加するための、いわば清めのような役割を帯びているのであろう。

アーシュラは池に映った月に石を投げて割っているバーキンの姿に出くわす。バーキンは“Cybele—curse her! The accursed Syria Dea!—Does one begrudge it her?” (323)と叫んで、石を投げつけている。キュベレとは大地母神のことであつて、これはシリアの女神のことである。またキュベレとは月の女神でもあつて、よつてアフロディーテとも一致する。バーキンは月の女神、すなわち性愛と豊饒の女神を呪っているのである。月は割れて光が散らばるが、しかし直に当然に月は元の姿に戻る。子供じみたこの行為はその象徴的な意味合いを探らねばなるまい。月が産む性としての女性を象徴しているのであるならば、その反射した光も女性的な感化力をもつであろう。闇や影はその月の姿を消そうと、このようにその反射光に襲いかかる。

Shadows, dark and heavy, struck again and again across the place where the heart of the moon had been, obliterating it altogether. (324)

池の表面は一面“a battlefield of broken lights and shadows” (323-34)となる。ダイバティスタはバーキンの月割りの行為をその否定的プロセスにも拘らず“a positive struggle to emerge from the womb of creation” (82)であると言う。女性的な光を打ち消す闇の横暴は彼の男性的な意志の現れなのであろう。

月についてロレンスは『無意識の幻想』(*Fantasia of the Unconscious*, 1923)において、二様の解釈を示している。一つはそれが極めて強い磁力的影響を身体に及ぼし、人間の活動性を司ることである。

The moon is an immense magnetic centre. It is quite wrong to say she is a dead snowy world with craters and so on. I should say she is composed of some very intense element, like phosphorus or radium, some element or elements which have very powerful chemical and kinetic activity, and magnetic activity, affecting us through space. (FU 139)

もう一つは月は個人を抹殺してしまう死を司る中心点であることである。

The moon is born from the death of individuals. All things, in their oneing, their unification into the pure, universal oneness, evaporate and fly like an imitation breath towards the sun. Even the crumbling rocks breathe themselves off in this rocky death, to the sun of heaven, during the day. (140)

人間の活動性はいわゆるエロスの衝動、個としての人間存在の死を誘う力はタナトスの衝動と言い換えられるであろう。この二面性は産みかつ殖やす能力と融合において抹殺する力を表しており、

いずれも女性的影響力である。月は女性的支配の象徴と言ってもよいであろう。

さてアーシュラがたまたまこういう月割りの儀式的場面に出合ったということ、またパーキンがアフロディーテの死に至る支配への指摘を行ったこと、さらにはグドルーンの支配的な肉欲性への描写との連続性で考えると、おそらくはここでいくら割っても割っても消え去らない月の姿は女性の支配的性格ということになるはずである。もっと詳しく言うと、月の反射はパーキンにとってのアーシュラの大地母神的支配性を表していると言ってもよいのである。しかし月は常に勝利する。女性の豊饒な生命力は否定しようがない。アーシュラは”She felt she had fallen to the ground and was spilled out, like water on the earth.” (324)と、自分自身が水面で割られたような印象を受ける。しかしまた月は平和に安定する。パーキンが”I want you to give me—to give your spirit to me—that golden light which is you” (326)と言うように、月の金色の光は明らかにアーシュラを表している。

そこで、彼らの会話が始まる。アーシュラはパーキンに自分に仕えてくれと申し入れる。それに対して、パーキンは逆に彼女の本質そのものを差し出せと言う。ロレンスはスコットランドの作家で若い頃からの友人であるカーズウェル(Catherine Carswell)に、1916年7月16日付の手紙で対立こそ愛の精髓であり”There is an extreme *self-realisation, self-sensation*, in this friction against the really hostile, opposite.” (1:468)であると言う。プライス(Martin Price)も言うように、動きを捨てて静寂を取る行為は死の内に休まる行為なのである(272)。軌轢こそがこの恋人たちの成長因子なのである。アーシュラはパーキンに自分は仕えずに、私に仕えろと要求するのは一方的なエゴセントリックな態度だと非難する。二人の議論は相当やりとりがあるが、しばらくは全くの平行線である。アーシュラはさらに手厳しく”You *don't* love me, you know. You don't want to serve me. You only want yourself.” (327)とパーキンに対して自分に仕えよと言い張る。アーシュラの女性性は月の光と平行してパーキンによって捉えられているのであるから、彼女の主張はパーキンには女性の始源的な太母性に自己を明け渡せという主張になるであろう。つまり、それはアフロディーテ的な性愛に屈することになるのである。これに対し、これはロレンス自身の主張であろうが、パーキンは自分はつまらぬ女性的性格は認めない、そんな女性的エゴは何の価値もないと言う。彼は”What you want me to serve, is nothing, mere nothing. It isn't even you, it is your mere female quality. And I wouldn't give a straw for your female ego—it's a rag doll.” (327)と言う。

徐々にではあるが、パーキンの言っていることの方が重みを帯びているように思われてくる。パーキンはアーシュラに自分の自己主張しがちなエゴを捨てて、自分を信頼せよと訴える。どうやらパーキンはアーシュラの中にある男を支配したいという心の動きを見抜いているようである。パーキンはアーシュラに””Your insistence—Your war—cry—”A Brangwen, A Brangwen”—an old battle-cry. Yours is ”Do you love me? Yield knave, or die.”” (328)と言って、彼女の中に男を膝まづかせて支配したい欲望を摘出してやる。これも男性中心的なロレンスの書きそうな件で、フェミニストには穏やかならざるものであろう。面白いのはその後にくるアーシュラの頑にパーキンの愛情を確認しようとする、取り乱した態度である。ここでアーシュラは必死にパーキンが自分を愛していることを確証してもらいたがっているのである。つまり二人の間の問題は、アーシュラとパーキンの愛の信頼関係の問題に収斂するのである。お互いの間に相手が誠に分を愛してくれているという確信が得られなければ、相互的なエゴの明け渡しは実現しないであろう。言い換えればアーシュラがあればどこく自分に仕えよとパーキンに言い張ったその根元にある原因は、彼女がパーキンが自分を愛していることが信頼できなかったからなのである。つまりアーシュラがパーキ

ンを支配したがっていたのは、彼の愛情が信頼できないから彼を繋ぎ留めておきたかったからであろう。自分の中に彼への全幅の信頼をおけないからこそ、その証として彼の奉仕を要求したのでであろう。アーシュラの心には埋められるべき、疑いの念があると思われる。

二人の間の関係は今後概ねバーキンがイニシアティブをとって進んでいく。その方向性は実はこの部分よりも前に既に彼が明らかにしているのである。それは星と星の間の均衡関係(equilibrium)で説明された、男女の理想的な関係である。シンプスン(Hilary Simpson)はロレンスは現代を母性支配と性的混乱の時代とみなしていたと言う(105)。彼には母性忌避の傾向があるであろう。それはバーキンの発言にも見出すことができる。彼は最初にそのバランスの理論をこうもち出している。

'What I want is a strange conjunction with you,' he said quietly; '—not meeting and mingling;—you are quite right;—but an equilibrium, a pure balance of two single beings;—as the stars balance each other.' (210)

バーキンは男女は独立した二つの存在として自我を堅く守り、おのおのに影響を及ぼし合うべきだと言うのである。

こうした議論についてロレンスは散文集の中の「愛」("Love," c.1917)においても、理想的な恋人たちの状態の例を光と闇の比喩を挙げ、このように説明を加えている。

There is twilight in our souls, neither light nor dark. The light must draw itself together in purity, the dark must stand on the other hand; they must be two complete in opposition, neither one partaking of the other, but each single in its own stead. (SE 27)

「月のごとき」の中での光と闇の比喩との関連で言えば、光は女性的な結合原理であり、闇は男性的な分離原理と考えられるであろう。またそうした理想的恋愛状態において、エッセイ「愛」によれば、男女は分離しつつも薔薇の花に擬せられる、ある達成状態におかれると言う。

We are two who have a pure connexion. We are two, isolated like gems in our unthinkable otherness. But the rose contains and transcends us, we are one rose, beyond. (28)

薔薇とはロレンスの詩集によれば、完全な生命の充足の象徴として使われている。

Or are we kindled, you and I, to be  
One rose of wonderment upon the tree  
Of perfect life, ...  
("Rose of All the World" St.6; CP 1:219)

「ヤマアラシの死についての考察」("Reflections of the Death of a Porcupine," 1925)においては、この男女の二項対立はたんぽぽの花の中にある精霊(The Holy Ghost)に凝縮されたものとして示されている。

All existence is dual, and surging towards a consummation into being. In the seed of the dandelion, as it floats with its little umbrella of hairs, sits the Holy Ghost in tiny compass.

The Holy Ghost is that which holds the light and the dark, the day and the night, the wet and the sunny, united in one little clue. There it sits, in the seed of the dandelion. (SE 67)

男女の対立原理は光と闇以外に、昼と夜、湿と乾の対立にまで拡大されている。そしてこの後で精霊の'Come!' (67)という叫びとともに、空からの太陽光と地底から吹き出す闇や湿気が混ざり合うという自然界の交流が詩的に語られる。だから、男女の対立は自然界の原理一般へと結びつけられているのである。

ところでアーシュラはそれは二つの星が独立しているのではなく、片一方が(つまり女性の方が)

別の方に（つまり男性の方に）依存している衛星の関係なのだと批判する。

'Yes—yes—' cried Ursula, pointing her finger at him. 'There you are—a star in its orbit!

A satellite—a satellite of Mars—that's what she is to be! There—there—you've given yourself away! you've said it—you've dished yourself!' (213)

バーキンではなくて、二つの星が影響を及ぼしつつも決して互いを支配しない関係が理想であると言う。

'I did not say, nor imply, a satellite. I meant two single equal stars balanced in conjunction—' (214)

さらに彼はアーシュラの非難にも拘らず、自己の主張を曲げない。

'... One must commit oneself to a conjunction with the other—forever. But it is not selfless—it is a maintaining of the self in mystic balance and integrity—like a star balanced with another star.' (215-16)

このように理想的男女関係は互いが互いを支配せず、完全に力を預け合って回転して行く二つの星の均衡関係と言えるのである。スピルカ(Mark Spilka)はこのペアの愛の関係を”Such forms of love involve the loss of selfhood; they depend upon the ancient theory that men and women are but broken fragments of one whole” (126) と言い、その根幹にプラトン(Plato)的な性の二分割論があることを指摘する。太古の昔男女は同一の人間存在であり、その後には性の分割を受け、元の半身を恋い慕うという考え方は多分にイデア的要素が強い。それは太古の完全性に憧れる行為だからである。しかしロレンスの場合は観念上の男女関係ではなく、もっとウェットな感性に基礎をおいた男女の理想像を追求している。これはいづれさらにロレンスによって踏み込んだ議論がなされ、もっとオカルト的な論に深まっていく。少しだけ具体的に言えば男女はただ相手愛するだけではなく相手の中の男性性や女性性を尊敬し合い、関係を深めるにつれてよりパーフェクトな男性または女性となるべきだと言い始めるのである。これはもう少し踏み込んだ時点で考察すべき事柄であろう。

#### IV

「月のごとき」の章の後半での、アーシュラとバーキンの愛の理想像についてももっと突っ込んで考察してみよう。アーシュラは何を男女の間で一番重要としているのであろうか。また、バーキンは恋人との関係で何を求めているのであろうか。ここでの後半においては翌日の場面において、バーキンが自分のアーシュラへの願望が単なる観念としての恋愛なのか、それとも深い内的な渴望の現れなのかと迷った状態で登場している。次第に彼は自分自身はこれ以上深い性的な体験は欲していないことに気づく。彼はアーシュラへのある恐れを抱く。それは彼女という存在は薄っぺらな単なる一個の女ではなくして、彼女の後ろには何千年もの純粋に性的で、非精神的な知識が控えていることに彼が気づくからである。彼は今まであまりにも知識あるいは知性に頼りすぎた恋愛観をもっていたことに思い至る。感覚を通じて進む、知性を欠いた知恵、あるいは感覚に捉えられ、感覚に終る知識もあってもよいのではないかと彼は考えるのである。そして、彼は自分の考えてきた”the death-break” (330) という崩壊に終る負の要素に反省を加える。

いわば頭でっかちであったバーキンがアーシュラに譲る道が、センシュアリティを認めた個人としての立場である。明確に彼は述べ始めるのだが、彼は愛というものは受け容れるが、そこに条件をつけるのである。それは孤立した、強い自我があくまでも愛や結合への欲求に優越するというこ

となのである。それをバーキンとは"a lovely state of free proud singleness" (332)と呼ぶ。ジタルークはこの立場を敷衍して"the achievement of individuality is at the base of every thing and that in man and woman it is the unfolding of the self that constitutes, as it were, the purpose of the individual's life" (240)と言う。

こういう状態でバーキンはアーシュラに求愛するが、完全に拒絶される。それは当然である。なぜなら、アーシュラは完全な愛による男女の結合を望んでいるのだから。彼女には彼の態度には混ざりものがある、何か策略めいたものが感じられるのである。彼女には彼は純粹に自分を愛しているわけではないとしか考えられない。そこでアーシュラはグドルーンに何でも相談し、二人で共同戦線を張るようになる。そこでアーシュラの達した知識は自分は男を全て自分の息子として見て、彼らの渴仰を羨み、彼らの勇気を讃えつつも、常に母親が息子を慈しむが如くに男に接するべきだということである。ところがグドルーンはどうしても男を恐れ、かつその活動力を尊敬せざるを得ない。

アーシュラにもおそらくバーキンを所有したいという幾分かの願いがあったのであろうが、グドルーンに焚きつけられる形で彼女はバーキンに敵対意識を燃やしている。それはグドルーンの男性への恐怖心からの防衛反応に影響されているからであろうが、徐々にそして過度にアーシュラはバーキンに反抗していくのである。そのことは"But Birkin—he is too positive. He couldn't bear it if you called your soul your own" (342)と言い、グドルーンがバーキンを恐がる場面設定に明らかであろう。グドルーンは最初からバーキンがあまりにも積極的すぎることに危惧を覚えてきたのである。こうした妹の密かな男性恐怖が影響して、アーシュラはバーキンに敵対意識を燃やす。

しかしいずれはこのブランクウェン姉妹は互いに離反してしまう。その大きな違いはおそらく姉アーシュラは自分に立ち向かう男性に抗う自我の強さをもっていたのに対し、妹グドルーンは自分に立ち向かってくる男性には一歩退いてしまう自我の虚弱さがあったことである。もちろんグドルーンにも自分のセクシュアリティの力にものをいわせて、ジェラルドを支配しようとする欲望はある。しかしグドルーンは案外後半でのジェラルドとの対立では自分に立ち向かってくる男性性にはかえって怯んでしまっ、レルケというマイナーな芸術家に気を許すというひ弱さを示すのである。

アーシュラは一度バーキンから遠ざかったように見えるが、今度は決定的に妹から離反して彼に接近しようとする傾向を示す。それはほおじろをめぐるアーシュラとグドルーンの対立から窺い知ることができる。アーシュラにはグドルーンが自分の勝手気儘にほおじろの性格を解釈しているように思える。グドルーンはほおじろの偉そうにしている態度が気に入らないのである。ほおじろには何の罪も意図もないはずである。ただグドルーンは自分のイメージを自然に重ねているだけであって、彼女は本質的に支配欲に満ちた女性なのである。アーシュラはバーキンが言うように人間は自分のイメージを宇宙に重ねているだけの存在であることに同意し、心情的に彼に接近するのである。

それでも二人の間には越えられない障壁がある。それは二人の間の愛の理想像の懸隔である。アーシュラはひたすらに男女の間の距離を埋めればよいのだと思っている。はっきり言って完全に結合すれば、それでこと足れりとするのがアーシュラの理想的恋愛の形態なのである。それが"unspeakable intimacies" (343)の意味であろう。ところがそれは意図するとせざるとに拘らず"To drink him down—ah, like a life-draught" (343)という男を吸収しつくす行為になってしまう。ちょうど海の潮が満ちてきて陸を飲み込んでしまうように、すべてを飲み干さねば我慢ならないのがアーシュラのセクシュアリティなのである。ロレンスは男女の愛の感情の動きや性的衝動を流れの比喩で表すこと

が多いが、アーシュラは男の側からの働きかけを禁じて流動性のない、女性的な静寂した愛の理想像をもっているのである。そのためにはパーキンには完全に自己放棄をつまり"complete self-abandon" (343) をしてもらう必要がある。

反対にパーキンが絶対に譲れないのがその自己放棄である。彼は"He did not believe in final self-abandonment." (343) とあるように、自己放棄の論理を認めない。アーシュラは完全に自我を明け渡して、愛が個人に優越すると信じている。パーキンは完全に逆に個人は愛やあらゆる関係そのものに優越し、個々の輝ける魂が単なる平衡の原理の維持のために愛を人間関係の一形態として受け容れるのである。彼にとって愛のうちに個我を抹消するなどということは考えられない墮落なのである。これが大きな理想的恋愛形態の違いである。また小説の進んでいく方向としてはパーキンの説く、人間はまずは個人として存在して、そして愛において他者と結び付く関係がこの恋人二人の間で達成されていくのである。ピニオン(F. B. Pinion)がロレンスは『恋する女たち』をその結論を念頭におかずには書き続けたと言うが(165)、この個我と愛の成就是ロレンス自身の探求であったであろう。

個我の完成と自由の問題はロレンスの詩集においても現れている。「宣言」("Manifesto")を挙げてみよう。

... there will only remain that all men detach themselves and become unique,  
that we are all detached, moving in freedom more than the angels,  
conditioned only by our own pure single being,  
having no laws but the laws of our own being. (St.8; CP 1:267)

これはそのまま『恋する女たち』の議論に結びつく論旨である。ちょうどパーキンが主張してもよきそんな内容が詩中の語り手によって詠われる。純粋な個人への信頼が得られれば"we shall love, we shall hate, / but it will be like music, sheer utterance, / issuing straight out of the unknown" (St.8)と雄弁にも続けられる。自発性の獲得はどうやら人間の原始的状態へのロマン的回帰として捉えられているようである。

「遠出」("Excuse")の章の前半では、パーキンは女性性に対してある恐怖感を抱いているように見える。彼はハーマイオニとアーシュラに対してそれぞれどういう恐怖感を抱いているのであろうか。その恐怖感から彼はどういう逃れの道を見出しているのであろうか。この章の前半では、引き続いてパーキンの恋愛観が披瀝される。その中で彼も女性に恐怖感を抱いていたことが明らかになる。ここではパーキンとアーシュラが二人して周遊旅行に出かけることになっている。パーキンは当然に今までハーマイオニには恐怖感を抱いてきたのであるが、それと同様にアーシュラにも"And was not Ursula's way of emotional intimacy, emotional and physical, was it not just as dangerous as Hermione's abstract spiritual intimacy?" (391)と恐怖感を抱いていたことがわかる。

二人の恋人の融合とは危険極まりない行為ではないのか、と彼はここで思う。ほとんどの男女が完全なる個人の融合を理想としているが、それは誤りではないか、と彼は考えるのである。すなわちハーマイオニは完全なる観念を目指し、アーシュラは完全なる子宮を目指しているのではないかと。これは意識のヴェクトルとしては完全に反対であるが、女性の支配的愛欲としては同一の情念から発しているとしか考えられないのである。パーキンは人間とは瞬間のうちには互いに没入してもよいが、他者に身を委ねてはならないと考える。他者に身を委ねるのがごく一般に見られる関係であろうが、ロレンスはそれが本質的な男女関係ではないと考えるのである。



では、パーキンはどこにそういうハーマイオニやアーシュラの女性性からの逃れの道を見出しているのでしょうか。それは「遠出」の後半に現れてくる、彼らの場所を変えた二回の抱擁において示されるのである。

この章の後半で、パーキンにとって男女の関係における他者性(otherness)とはいかなるものであるかが示される。他者性とはどのようにして達成されるのでしょうか。その他者性はジェラルドとグドルーンとの関係とは違って、パーキンとアーシュラの場合にはどのような効果をもつのでしょうか。

パーキンとアーシュラの至った恋愛の最後の形態は、誤解を生じるかもしれないが、互いを個人としては愛さないということであると思われる。それは新しい他者性の認識に繋がる行為であろう。われわれが他人を知ることはいかにその人の本質を見抜くということではなく、その人のある属性とか習慣とか地位とかを知ることの範囲に留まるのであろうが、ロレンスが言う他者性の認識はそれを遙かに越えるもっと奥行きのある他者の認知なのである。

まずは、パーキンとアーシュラの行方を追って行きたい。彼らはサウスウェル寺院(Southwell Minster)の近くにあるサラセンズ・ヘッド(the Saracen's Head)という宿を訪れる。そこでの最初の抱擁において、暖炉のそばの絨毯の上で、アーシュラはパーキンが人間の男性以上のものであることを認識する。この状況は"It was here she discovered him one of the sons of God such as were in the beginning of the world, not a man, something other, something more." (395)という文章に示されている。この感情はアーシュラにとっては愛でも情熱でもない。さらにはロレンスは"It was the daughters of men coming back to the sons of God, the strange inhuman sons of God who are in the beginning." (395)と繋げている。そうしている際にアーシュラ自身も"She was beautiful as a new marvellous flower opened at his knees, a paradisaal flower she was, beyond womanhood, such a flower of luminousness." (396)という具合に、単なる一女性としての存在を越えてしまうのである。ここは要するにアーシュラがパーキンの下半身に縋りついて、その男性的魅力に夢中になっている場面なのである。ただアーシュラはパーキンのファロスの魅力の遙か奥底に、言語に絶する男性性の根源があることを見出しているのである。

She had thought there was no source deeper than the phallic source. And now, behold, from the smitten rock of the man's body, from the strange marvellous flanks and thighs, deeper, further in mystery than the phallic source, came the floods of ineffable darkness and ineffable riches. (397)

アーシュラは一男性としてのパーキンを越えて、彼の奥底にある男性性という血の流れを認識していることになる。この辺りの描写の、神の子としての男性に恋する人の子としての女性とか、一人の男性の裏側に流れる聖なる河のような男性性の流れとかなどは、フェミニストが聞けば穏やかでない男性至上主義の描写である。ドレイパー(Ronald P. Draper)はアーシュラの生得的な自発性の能力を高く評価し、彼女はパーキンを知性主義の罫から解放すると言うが(83)、ロレンスがパーキンの側に優位性のある描写をしていることは否めない。神の子に恋する人の子の女は、エンジェルたちに恋した人間の女たちを扱った「創世記」の件を反映しているからである。確かに、ロレンスにおける男性至上主義的傾向は認めなくてはならないと思われる。

それはともかくとして、ここでアーシュラは一人の男性の裏側に流れる男性性という血の流れに気づいたのである。彼女はその男性性を尊重し、畏怖せねばならないと思うのである。そうこうするうちに"Besides, she had a full mystic knowledge of his suave loins of darkness, dark-clad

and suave, and in this knowledge there was some of the inevitability and the beauty of fate, fate which one asks for, which one accepts in full.” (400) というように、アーシュラは否応なくパーキンの力に引きつけられてしまう。パーキンは「記憶に絶する太古からの力」(“immemorial potency” [400])の中に、自分が鎮座していることに気づく。この辺の前後はアーシュラの体験に語り手が焦点を絞っているという関係もあるが、男性中心主義の匂いがおんおんとする。ロレンスにとって文明の頽廃はアフリカでも現代西洋社会でも同じ人類の墮落であり(Ford 178),その解決は身体の奥所にある神秘の感得にある。アーシュラはパーキンに、言葉は悪いが、ひれ伏す。彼女は話すことも見ることもやめ、ひたすらにパーキンの肉体に触れなければならない。彼女は考えることをやめさせられ、知識を放棄させられてパーキンと接触する。ここの表現をロレンスは“the reality of surety in not-knowing” (402) と言い、むしろ知識が消滅したところに彼を愛しているという確信が顕在化すると言いたいように思われる。オウツ(Joyce Carol Oates)は逆にアーシュラがパーキンを救う立場にあったと言うが(225),これは後者の方が男女の性愛に積極的に取り組み、ロレンスの思想の代弁者として性愛の問題に正面きって関わっていたからそう見えるのだと思われる。

そしていよいよ、ロレンスの新しい男女間の理想像のモデルとなっている「星の均衡」つまり“star-equilibrium” (402)という言葉が導入される。つまり男からの愛情と女からの愛情が釣り合って、相互の自由と愛が同時に成立している状態なのである。

彼らのいる場所は、今度はイギリス中部のノッティンガムシャー(Nottinghamshire)にある森の、シャーウッド・フォレスト(Sherwood Forest)である。ここでパーキンとアーシュラはこの世にいながら、別世界の夜を体験する。闇の中で互いに服を脱ぎ合って、触感において彼らは生における他者性を知るのである。すなわち意識における他者とは観念という死んだものに化さざるを得ないが、触感によって相手は他者として自分の経験の中に生き続けるのである。パーキンにとってアーシュラは“the immemorial magnificence of mystic, palpable, real otherness” (403)であったと言われている。

パーキンの体験に関する描写が少ないが、相手の中にある性の偉大な力を讃えるような描写との類似性から推して、パーキンもアーシュラに似たような一女性をこえた女性性の力を感じ取っているのであろう。しかしむしろ、パーキンは女性性を越えて、自分たちと似たような、つまり性的な充足に基礎をもつ小集団を見出して、その集団の中に理想的なユートピアを建設しようとする願いを打ち明けるのである。それはアーシュラとの別世界の夜の体験より少し前に、既に明らかにされている。彼はこのように言っている。

‘There’s somewhere where we can be free—somewhere where one needn’t wear much clothes—none even—where one meets a few people who have gone through enough, and can take things for granted—where you can be yourself, without bothering. There is somewhere—there are one or two people—’ (398)

シンプソンはロレンスにおける男性の共同体建設欲求を指して“A greater impulse than the sexual is ‘the desire of the human male to build a world’” (94) と言うが、おそらく性的欲求と世界建設のそれは分離不可能ではあるまいか。特定の異性の性的根源に悠久の生命的かつ自然的エネルギーを感受する別の異性は、相手の固有名詞性の裏側に大文字の他者(the Other)あるいは他者性(the Otherness)の存在を見出すであろう。それは固有名詞的他者あるいは固有名詞的自己の間の優越性や劣等性を超越する視座の獲得である。大文字の他者を見ることのできる人間集団は階級的軛を既に超越している。ここではパーキンは直接はジェラルドも交えた男女の共同体を幻想している。パー

キンがジェラルドを交え(それは必然的にグドルーンの介入も要求する事態を招来するであろうが)共同体建設を志向することには、明らかにユートピア建設の衝動がその背後に控えているはずである。とすれば、性的な意味での人間性の復権は世界更新の意図をその射程内に捉えているのである。パーキンとジェラルドの二人の男性の間には”the seeds of a strong, inflammable affinity” (62)があるとロレンス自身が『恋する女たち』への序論(“Prologue to *Women in Love*”)の中で言っている。作家自身の思い入れのある男同士の友情関係であるが、これは直接的にはここでは発展しないユートピズムの要素に還元される。

しかしユートピア願望は『恋する女たち』の出版前から最晩年に至るまで、ロレンスの胸中に留まって離れなかった。いわゆる理想郷ラーナニム(Rananim)の建設への意欲である。強い友情の絆で結ばれ、ロシア文学の翻訳者でもあった友人コテリアンスキー(Samuel Solomnovich Koteliansky)宛の1915年2月5日付けと思われる手紙の中で、ロレンスはラーナニムへの意欲をこのように伝えている。

We are going to struggle with my Island idea—Rananim—But they say, the island shall be England, that we shall start our new community in the midst of this old one, as a seed falls among the roots of the parent. Only wait, and we will remove mountains and set them in the midst of the sea. (1:314)

ロレンスはバートランド・ラッセル(Bertrand Russell)を中心とした友人たちにイギリスこそが、戦争の避難所としての楽園たるべきであると説得されたのである。しかしロレンスは従来からあくまで遠く離れた孤島こそが「島」楽園としてのラーナニムに相応しいと考えていた(清水 261)。それほど彼にとってラーナニムは超俗的な要素が強かったのであろう。南アメリカからアンデス、さらにニュー・メキシコのタオス(Taos)の農場などへとラーナニムの願望は移動する。1925年頃にその願望はいったん下火になるが、生涯にわたりロレンスの夢として心の中に燃え続けていったらしい(清水 263-65)。マリ(John Middleton Murry)とマンズフィールド(Katherine Mansfield)に宛てた1916年3月5日付の、イギリス南西部の端にあるコーンウォール(Cornwall)のセント・アイヴズ(St Ives)の近くから送った手紙の中で、ロレンスはわざわざ見取図付きでコテージの様子やフリーダ(Frieda)との快適な生活を描いている。そこでロレンスは彼らにラーナニムの件をこう思い起こさせている。

I don't want you to take it if you feel in the least uneasy: only we shall take our 2-roomed cottage, if possible, at once, and gladly await you, if you feel like coming. It would be so splendid if it could but come off: such a lovely place: our Rananim. (1.440)

またダービーシャー(Derbyshire)のニューベリー(Newbury)の近くのコテージからは、コテリアンスキーに再び1918年2月16日付の手紙で、ロレンスはこう楽園ラーナニムへの願望を訴えている。

I have had a sore throat for such a long time now, that I am getting thoroughly tired of it. Oh my dear, dear Kot, why didn't we go to our Rananim! What a weak-kneed lot we were, not to bring it off. I do so want something nice—or bit of a pleasant world somewhere—nothing but the corner of cemetery seems to offer—I might find a slab there first. (1:540)

この頃ロレンスはコーンウォールでスパイ容疑で取調べを受けたり、徴兵検査で屈辱的な不適格診断を下されたりして、心身ともに不調であった。ともあれ理想的共同体への願望は彼の小説中では具体的な形態で現れてこなくても、脈々と息づいていると考えねばならない。

バーンズは共同体を離れた自由はあり得ず、ラーナニムのようなユートピアは唯一聖者のみに可

能な世界であると言う(99-100)。しかしユートピアをそもそも現実世界と結びつけるのは、ユートピアのもつ基本的性格を無視している行為である。言わずと知れたことだが、ユートピアは良き場所(*eu-topia*)と無い場所(*ou-topia*)の連結した文学的トポスである。それは永遠に捜し続けるべき場所であって、いわば人間の本能的理想追求願望の謂である。バーンズはユートピアの論理のレベルを無視しているのである。ロレンスの場合はユートピアは場所の問題と言うよりも、個人の内面の開示や他者へのスタンスの問題において論じられなければならない。そしてその理想郷の探求は男女の理想的関係から、自然界とのロマン的な有機的交感関係、そして新しい個人主義に立脚した民主主義へとロレンスの内面において発展していくのである。

ともあれバーキンとアーシュラの星の均衡の関係は図式的に述べれば、バーキンはアーシュラの奥にある女性性を崇拜し、アーシュラは逆にバーキンの奥にある男性性を崇拜すると言えるであろう。彼らは表層の感覚器官を使いながらも、相手の個人的人格の裏にある悠久の血の流れを見出すのである。そして彼らは互いの男性的ならびに女性的な部分を強め合いつつ、絡み合いつつ回転していく関係を維持するのである。『精神分析と無意識』(*Psychoanalysis and the Unconscious*, 1923)において、ロレンスは男女は“the polarized flux between the spontaneous self and some other self or selves”(PU 119)の結果として成長すると言う。ロレンスはここで個人の成長を“the interaction between the individual psyche and the outer universe”(119)の結果であるとも言い、人間の自然界への参入も「流れ」の比喻で語られるロマン的交感関係で説明している。彼にとって男女の愛は自然の生命的エネルギーを感受するための基本的なモデルであったのである。

ロレンスの無意識の捉え方は明らかにフロイド(Sigmund Freud)の理論に影響されている。しかしサルガード(Gamini Salgado)によれば、フロイドは無意識を抑圧された性欲の貯留所と考えたのに対して、ロレンスはそれを人間の創造的能力に溢れたエネルギーの源と考えたらしい(88)。この点で後者の二極性の対立による人間進化の可能性への道が開かれていく。

シュナイダー(Daniel J. Schneider)は優れた手さばきでロレンスの人間進化の心理学的分析を提供している。この批評家によれば人間のサイキは権力を志向する意志の中心と愛を志向する共感的中心を結ぶ横の線によって上下に、客観的かつ精神的中心と主観的かつ感覚的中心を結ぶ縦の線によって左右に四分割される。左上部の意志的かつ客観的中枢は他者を自己との対立の相によって捉える精神的意志を司る部位である。右上部の共感的かつ客観的中枢は己の愛を他者に与えるか、己を他者と合一させる無私への精神的欲求を司る部位である。左下部の意志的かつ主観的中枢は他者から己を独立あるいは分離させたがる感覚的意志を司る部位である。右下部の共感的かつ主観的中枢は他者と自己を一致させ、他者との同化あるいは融合を目指す感覚的欲求を司る部位である。これら四つの部位はそれぞれ身体の胸部神経節(Thoracic Ganglion)、心臓叢(Cardiac Plexus)、腰部神経節(Lumbar Ganglion)、太陽叢(Solar Plexus)に対応する(61)。

シュナイダーによれば権力への衝動は他者を排除した上で真の自己を求めるのに対し、愛への衝動は他者との融合において拡大された自己を求める。客観的中心は人間に自己から区別されたものとして対象の知識を得させようとし、主観的中心は自己がその一部分なる対象への知識を得させるものとされる。もし人間が権力への衝動のみに従い自己実現を追求すれば、他者とのあらゆる関係を断たねばならない。よってこの衝動は共感的中心によって、適度に調整を施され、他者との有機的結合への道が確保されなければならない。しかし逆に愛への衝動のみに従えば、人間はただの受動的な愛する対象が集合的意志への奴隷に堕してしまうであろう。同様に客観的中心にのみ執着すれば、人間は個を遙かに凌駕する抽象的実在のみを追いかけるようになる。そのような人間の個と

しての統合性は次第に剝奪されていくであろう。よって人間は感覚的中心の力に従い、現実の世界からの耐えざるエネルギー補給を受けねばならない。しかし逆に感覚的中心に帰依し過ぎれば、その人間はいわゆるナルシズムの傾向を深め、最終的には誇大妄想的な自己中心主義者に至ると言わねばならない。人間心理のこれらの二極性は重なりあって、四極性の構想を成す。この四極を統合・調整するのが、自立的なバランス機能を帯びた精霊(The Holy Ghost)である。これはフロイド的には超自我に当たるものであるが、同時に三つの点で自我の機能も引き受けたサイキの中心に位置する。第一に精霊は自己保全本能に従い、主体を健康的に保つよう調整する。第二に精霊は主体の能力の限界点を感じ、主体の極への過度の接近を阻む。第三に精霊は自己の行為への審判を下し、自己自身の内的判断により好ましい行為を選び取らせる。精霊は超自我と同様に無意識から発生するが、超自我とは違って社会的懲罰の機能は帯びていない。むしろ精霊は人間の潜在能力を拡充・実現させる、喜ばしき機能を果たすのである。精霊に敵対するものは保守的サイキ(conservative psyche)である。精霊が健康的で自発的な良心であるのに対し、保守的サイキは不健康かつ機械的な、社会的に形成された良心である。ロレンスは大部分の人間が前者ではなく、後者に従って生きていると考えているらしい。このようにシュナイダーはロレンスの理論を敷衍して、人間存在は四極のバランスによって成長していくと考えているのである(59-71)。

『恋する女たち』の登場人物たちもこの四極構造の上を揺れ動くのである。そしてジェラルドやグドルーンの悲劇は権力的部位への偏向性の故にもたらされ、パーキンとアーシュラの恋愛の成就是互いの反発と吸引の末にバランスのとれたサイキが相互に完成したからであろう。バランスは唯一極と極との対立によってもたらされるのである。

さて、パーキンとアーシュラは互いに接近しつつも、決して同化してしまうことはない、離れた愛情関係を樹立するのである。いわばこの男女関係は永遠に回転しつつ、相手を高め合い、それでも決して二人が分離することはない関係なのである。こうした人間の内奥にある個人を越えた男女の血の流れへの信頼は、ロレンスの別の作品にも流れている思想である。そしてパーキンが言う理想的なユートピア的な共同体を造ろうとする姿勢は、血と血の盟約による人間の結合に向かうのである。ロレンスはだいたい、最初は男女の間の愛に現代の人間たちにとっての結合の原理を見出すのであるが、次第にその態度は権力への意志にその礎を見出すようになる。そしてだんだんと彼は簡単に読者がついていけないような、オカルト的な世界に踏み込んでいくことになるのである。

『恋する女たち』という作品はまだ普通の読者でもそれほどの抵抗がなく受け容れられる作品であるが、たとえば『翼ある蛇』辺りになるとかなり不可思議な世界に入り込まなければならなくなる。そして『恋する女たち』に示されているような男女の愛情関係は人間関係の水平的な結びつきであり、男女は一応は平等な立場で関係し合う。しかし『翼ある蛇』では人間は英雄的な男性、あるいは男性たちのもとに集い、その英雄の権力を讃えて垂直的な視点で人間が結合することになる。

『翼ある蛇』において、ケイト(Kate Leslie)は先夫の弁護士との間に二人の子供をもうけながらも、アイルランド独立運動家と再婚している。夫の悲願もならず、彼は死ぬ。ショックで西洋文化に愛想をつかしたケイトはメキシコに赴く。40歳のケイトは自分の人生を根本的に見つめ直す時期がきていることを知る。彼女はアーシュラと同様に、自己探求の姿勢を受け継いだ女性なのである。ケイトは闘牛見物に行った帰りにシプリアーノ將軍(General Cipriano Viedma)に出会い、後のパーティーの席で彼の友人のラモン(Ramón Carrasco)にも知り合う。ラモンはシプリアーノと協力してアステカの神ケツアルコアトル(Quetzalcoatl)を再生させようと企てている。ケツアルコアトルは鷲と蛇の合体した姿で表され、羽毛を付けた蛇である。ラモンは古いケツアルコアトルへの信仰を復

活させることによって、メキシコの国民に精神的支柱を与え、母国を混乱から救おうとしたのである。ラモンの運動はカトリック教会を破壊することに繋がる。彼の最初の妻カルロッタ(Carlota)は敬虔なクリスチャンで、養育院で捨子を預かり育てる仕事をしていて、ラモンがキリストの像を焼き捨て、代わりに教会にケツアルコアトルの像を祭るようになると、妻はこれを悩んで死んでしまう。ラモンには敵が多かった。ラモンの護衛兵が反乱の鎮圧に出動中に、暗殺団は彼を殺害しようとする。それにはラモンの部下たちも含まれていた。ケイトはその場において、ラモンを殺そうとした男の頭を否応なくピストルで撃ち抜かねばならなくなる。ラモンは自分がケツアルコアトルの化身であると言い張り、シブリアーノはもう一人の生神であるウィチロポチトリ(Huitzilopochtli)であると言う。シブリアーノはケイトに求婚するが、最初はそれを受け容れる気にはなれない。彼女の心の奥底にはこのままメキシコにいて、ラモンの集団に関わってはいけないという気持ちがある。かといって、ヨーロッパの旧世界に帰るのものはばかられる。ケイトは最後はシブリアーノの気持ちを受け容れて、メキシコに留まる気持ちを残している。

このようにロレンスはオカルト的な世界で、男性の宗教結社的な集団に女性はやはり服従という形で参加せざるを得ないことを示すのである。これとは時間的には前後するが、『アロンの杖』では男性の自己中心性がもっとクリアに現れる。ここでは明らかに女性は男性の権力意志のために捨てられてしまうのである。『アロンの杖』は主人公のアロン(Aaron Sisson)が妻ロッチェ(Lottie)のいる家庭を去り、リリー(Lilly)というロレンスの思想を代弁する男に身を預けるに至る物語である。アロンはクリスマスの晩に家庭を捨て、自分一人の放浪の旅に出る。彼にとって妻は愛の対象ではあっても、自分を支配する、決して男の自我の解放を許さない女である。アロンは自分は家庭の中心ではなく、女に次第に喰い潰されていることを認めざるを得ない。この点でロッチェはハーマイオニ・タイプの女性である。アロンは幸いフルートが吹けるのでオペラの演奏の仕事をしている。アロンは自分が厄介になっているジム(Jim Bricknell)の婚約者ジョセフィーヌ(Josephine Hay)と浮気しても、自分が女性に支配されているという感情を禁じ得ない。

ロレンスは人間同士の関係を、大きく「愛の関係」と「力の関係」に分けて考えている。『恋する女たち』ではアーシュラとバーキンの関係は前者で、男女間関係があたかも星と星が釣り合う均衡関係にあることが理想とされていた。しかしながら、そこにはバーキンが言ったように不足な部分がある。それはアーシュラとの愛の関係では満足できない、ジェラルドとの男同士の友情関係であった。ディックス(Carol Dix)はロレンスが若い頃の恋人ジェシー(Jessie Chambers)の兄アラン(Alan)にホモセクシュアル的憧れを抱いていたことを挙げ、彼の同性愛的傾向を指摘する(94)。そうした根拠からディックスはロレンスはグドルーンを己の他我(alter ego)として利用し、ジェラルドへのホモセクシュアル的固着を示すのであるとまで言う(97)。マクラウドも『恋する女たち』をロレンスが自らの同性愛的傾向を扱った作品として認める(38)。ロレンスの同性愛は指摘はされ得るであろうが、過度に論じるのは危険であろう。何故ならそうした傾向は彼の個の確立を目指す哲学の本質から逸脱するのだから。

『アロンの杖』ではロレンスはその男同士の関係を追求している。つまり愛情による人間関係から力による人間関係へと小説の焦点が移っていくのである。その際にロレンスは男同士の導かれる者と導く者の関係を描く。その導き手がリリーである。リリーはロンドンで発熱し衰弱したアロンを見つけ、オイルで彼の下半身全体をマッサージしてやり、元気を取り戻させる。アロンは妻ともジョセフィーヌともうまいかなかった関係がリリーとは保てると思う。『アロンの杖』全体が理屈っぽいのだが、それに輪をかけてリリーはいろいろな教えをアロンに言い渡す。その全体がロレン

スが模索しつつも、臆気に擱んでいく力への信奉なのである。リリーに言わせると、結婚生活とは「二人でいるエゴイズム」(*Egoïsme à deux*)なのである。リリーは結婚生活は互いが互いを所有し合うもので、互いに自由でありかつ永遠に分離することのない関係が理想の男女関係であると言う。これはバーキンの「星の均衡」の考え方とほぼ等しい。妻との関係に再度破れたアロンは自我の独立性を祝福するようになる。これは『恋する女たち』から徐々に離れていく態度である。アロンはまずは孤独であることの価値を知る。彼はリリーにまた教えを乞いに行くが、彼がイタリアに赴いたことを知り、同じくイタリアへ向かう。アロンはフルートができることを活かして、貴族たちの仲間と知り合いになる。フルートはアロンの杖の意味である。彼はそのうちマンフレディ侯爵(Count Manfredi)の妻と関係するが、またしても自分が侯爵夫人の欲望の捧げ物になっていることを悟り、これは自分の真に望んでいる男女関係ではないと思う。アロンはアナキストの爆弾事件に巻き込まれて、彼のフルートは粉々に壊れてしまう。彼と貴族社会を繋ぐ絆が壊れ、アロンは自分が身を委ねる者がリリーしかないことを知る。アロンは一度目は女性との関係(つまり結婚生活)で自分の生き方を確認することを失敗する。彼は二度目は安直に社会の制度や機構に身を委ねて、人と関係していくこと(つまり社会生活)も拒否する。それは自分の内部から出た、人間関係への意志ではない。ただ、社会生活とは外部的な取り決めに身を委ねることではしかなかったのである。アロンは生身のリリーという人間を英雄として、身を捧げることにする。後はアロンがリリーの説を受け容れるだけである。リリーの教えは抽象的なロレンスの説の展開になる。それは男女関係では、女性是完全に男性に従属しなければならない、というものである。こういう部分がフェミニストの批判を受ける箇所であろう。リリーは女性に奴隷的ではなく、男性の中の昇華された男性性(masculinity)に一片の私利私欲もなく従属しなければならないと言う。そして彼は男性はというと、内面から人を揺り動かす「力」をもった指導者に従わなくてはならないと言う。ここにファシズムとか全体主義的傾向を指摘する批評もあったようであるが、ロレンスの言う「力」とは「権力」ではなくて、精神的な「指導力」を指しているのである。つまり「アロンの杖」とはモーゼ(Moses)の弟であり、かつエホバ(Jehovah)によって任命された司祭であるアロンという宗教的指導者が揮った杖のことを指すのである。「アロンの杖」は宗教的権威の象徴なのである。とすると、『アロンの杖』という作品での「力」への期待は、宗教的な意味合いを強く帯びていることになる。それは魂の指導者への帰依であり、もっとはっきり言って、たぶんロレンス自身の迷える魂を導く、魂の指導者への待望を表わしていると思われる。これは標準的に言って大変にわかりづらい作品であり、ロレンスもおそらくは明確には書けなかった思想ではないかと思われる。

よって少なくとも『恋する女たち』の段階では「星の均衡」という概念で、男女関係が一応の安定した状態にあったのが、いずれはロレンス自身によって否定されていくのである。ところで、ジェラルドとグドルーンの関係の発展あるいは没落の相はどうであろうか。

ジェラルドは父親トマス(Thomas)の死後ますます、精出して炭坑経営に乗り出す。彼は利益のためなら労働者を残酷に扱っても何とも思わない、産業王となるのである。またジェラルドは自分の馬を面白半分で機関車にぶつけて怪我をさせたり、兎を乱暴に虐めたりすることに喜びを見出すのである。要は彼は権力による支配欲に憑かれた人間となるのである。ユディシュターがジェラルドに対して“Everything in the world, he believes, has its function, and its goodness or otherwise depends on how well it performs this function” (193)と言う、彼の機能優先主義についての指摘は正しい。一方グドルーンはそんな彼がやりきれなくなり、アルプスに旅行に行った折りに彼と大喧嘩する。理由は彼女はふとしたはずみでジェラルドの代わりに、ボヘミア的な芸術家レルケに

横恋慕したからである。レルケは墮落した商業主義に仕える”the embodiment of depersonalizing will and mechanical industrial efficiency” (Pinion 169) と言うのが相応しい、根無し草の人物である。オウツはレルケ(Loerke)の名前は北欧の不和と悪意の神ロキ(Loki)からきていると指摘する(228)。

ジェラルドはそんなレルケが大嫌いだし、浮気したグドルーンが許せない。ジェラルドはグドルーンをこのように攻撃する。

‘What makes you so smitten with that little vermin?’ he asked, really puzzled. For he, man-like, could not see anything attractive or important *at all* in Loerke. Gerald expected to find some handsomeness or nobleness, to account for a woman’s subjection. But he saw none here, only an insect-like repulsiveness. (533)

ジェラルドは自分が下賤なレルケごときに負けたことに腹立たしくてならない。すなわち、彼は権力でグドルーンの気持ちを自分に向けさせておかなければ気が済まないのである。それでもグドルーンが自分に気持ちをもう向けてくれないとわかると、ジェラルドは彼女を発作的に殺してしまうおうとするのである。

He took the throat of Gudrun between his hands, that were hard and indomitably powerful. And her throat was beautifully, so beautifully soft, save that, within, he could feel the slippery chords of her life. And this he crushed, this he could crush. What bliss! Oh what bliss, at last, what satisfaction, at last! The pure zest of satisfaction filled his soul. (572)

ここでジェラルドが恋人の殺害に喜びや性的歓喜を覚えていることに注目すべきであろう。つまりジェラルドは本質的に相手を押え込み、殺してまでも所有しなければ満足できないセクシュアリティをもっていたのである。この後ジェラルドは自殺してしまうが、グドルーンは運良く一命は取り留めて助かる。ジェラルドが雪の中に見出す十字架はアイゼンシュタイン(Samuel A Eisenstein)の言うように”This symbol of resurrection is anathema to him.” (52)なのである。これは資本主義の権化の哀れな呪われた死である。そしてグドルーンが以前に雄牛に混じってダンスしてジェラルドを誘惑したと併せて考えれば、彼らの間の関係は図式的に言って、ジェラルドはグドルーンに権力による支配欲を向け、グドルーンはジェラルドに性的魅力による支配欲を向けていたと言えるであろう。

このようにして、ジェラルドとグドルーンのペアは破滅に至るのである。バーキンとアーシュラのペアは互いの相手の裏側に流れる性的な流れの力に目覚め、お互いに男性・女性として成長していったと言えるであろう。それに対して、ジェラルドとグドルーンのペアは互いに死に至るような支配欲に憑かれた男女として、ロレンスが描いていったと理解してよいであろう。それはおそらくは将来ロレンスが発展させる、血の盟約といった考え方の相で言えば、前者のペアは互いの存在の奥に流れる血と血の、太古の昔から男女の間に流れてきた、オカルト的な繋がりに目覚めていたのに対して、後者のペアは相手の皮相的かつ肉体的な存在にしか気づかなかったと言えるであろう。

『アポカリプス』での結語に至る物質主義を否定し、肉体の奥底にある神秘を強調する萌芽が既にここにあるのである。その結語はこのようなであった。

What we want is to destroy our false, inorganic connections, especially those related to money, and re-establish the living organic connections, with the cosmos, the sun and earth, with mankind and nation and family. Start with the sun, and the rest will slowly, slowly happen. (A 126)



## 参考文献

- Balbert, Peter and Phillip L. Marcus, eds. *D. H. Lawrence: A Centenary Consideration*. Ithaca: Cornell UP, 1985.
- Bloom, Harold, ed. *D. H. Lawrence. Modern Critical Views*. New York: Chelsea House, 1986.
- Burns, Aidan. *Nature and Culture in D. H. Lawrence*. London: Macmillan, 1980.
- Clarke, Colin, ed. *D. H. Lawrence: The Rainbow and Women in Love*. Casebook Series. Gen. ed. A. E. Dyson. London: Macmillan, 1969.
- Daleski, H. M. "Women in Love: Firm Singleness and Melting Union." 1965. Clarke 151-66.
- DiBattista, Maria. "Women in Love: D. H. Lawrence's Judgment Book." Balbert 67-90.
- Dix, Carol. *D. H. Lawrence and Women*. London: Macmillan, 1980.
- Draper, Ronald P. *D. H. Lawrence*. Twayne's English Authors Series. Ed. Sylvia E. Bowman. Boston: Twayne-G. K. Hall, 1964.
- Eisenstein, Samuel A. *Boarding the Ship of Death: D. H. Lawrence's Quester Heroes*. The Hague: Mouton, 1974.
- Ford, George H. "Women in Love: The Degeneration of Western Man." 1965. Clarke 167-187.
- Hardy, Barbara. "Women in D. H. Lawrence's Works." 1973. Bloom 133-46.
- Kermode, Frank. "Lawrence and the Apocalyptic Types." 1970. Bloom 59-71.
- Lawrence, D. H. *Aaron's Rod*. 1922. Harmondsworth: Penguin, 1950.
- . *Apocalypse*. 1931. Harmondsworth: Penguin, 1974.
- . *The Collected Letters of D. H. Lawrence*. 2vols. Ed. Harry T. Moore. London: Heinemann, 1962.
- . *The Complete Poems of D. H. Lawrence*. 2vols. Ed. Warren Roberts. London: Heinemann, 1964.
- . "Democracy." 1936. *Selected Essays*. 73-95.
- . *Fantasia of the Unconscious*. 1923. London: Martin Secker, 1933.
- . "Foreword to Women in Love." 1920. Clarke 63-64.
- . "Love." c.1917. *Selected Essays*. 24-30.
- . *The Plumed Serpent*. 1926. Harmondsworth: Penguin, 1985.
- . "Prologue to Women in Love." 1963. Clarke 43-62.
- . *Psychoanalysis and the Unconscious*. 1923. London: Martin Secker, 1931.
- . *The Rainbow*. 1915. Harmondsworth: Penguin, 1949.
- . "Reflections of the Death of a Porcupine." 1925. *Selected Essays*. 55-72.
- . *Selected Essays*. Harmondsworth: Penguin, 1950.
- . *Sons and Lovers*. 1913. Harmondsworth: Penguin, 1986.
- . *Women in Love*. Ed. Charles L. Ross. 1920. Harmondsworth: Penguin, 1986.
- MacLeod, Sheila. *Lawrence's Men and Women*. London: Heinemann, 1985.
- Meyers, Jeffrey. *D. H. Lawrence and Tradition*. London: Athlone, 1985.
- Oates, Joyce Carol. "Lawrence's 'Götterdämmerung': The Apocalyptic Vision of 'Women in Love.'" 1981. Bloom 215-31.
- Pinion, F. B. A *D. H. Lawrence Companion: Life, Thought, and Works*. London: Macmillan, 1978.
- Price, Martin. "Levels of Consciousness." 1983. Bloom 255-74.
- Sager, Keith. *The Art of D. H. Lawrence*. 1966. Cambridge: Cambridge UP, 1975.
- Salgado, Gamini. *A Preface to Lawrence*. London: Longman, 1982.
- Scheckner, Peter. *Class, Politics, and the Individual: A Study of the Major Works of D. H. Lawrence*. Rutherford: Fairleigh Dickinson UP, 1985.
- Schneider, Daniel J. *D. H. Lawrence: The Artist as Psychologist*. Lawrence, Kansas: UP of Kansas, 1984.

清水康也『D. H. ロレンス—ユートピアからの旅立ち—』東京：英宝社，1990年。

Siegel, Carol. *Lawrence among the Women: Wavering Boundaries in Women's Literary Traditions*. Charlottesville: UP of Virginia, 1991.

Simpson, Hilary. *D. H. Lawrence and Feminism*. London: Croom Helm, 1982.

Spilka, Mark. *The Love Ethic of D. H. Lawrence*. Bloomington: Indiana UP, 1957.

Trease, Geoffrey. *D. H. Lawrence: The Phoenix and the Flame*. London: Macmillan, 1973.

Yudhishtar. *Conflict in the Novels of D. H. Lawrence*. Edinburgh: Oliver & Boyd, 1969.

Zytaruk, George J. "The Doctrine of Individuality: D. H. Lawrence's 'Metaphysic.'" *Balbert* 237-53.

(1993年8月31日受理)